

法政大学
国際日本学研究センター
国際日本学研究所

Hosei University Research Center
for International Japanese Studies

The Newsletter



No.15 Dec.2011



C O N T E N T S

センター長ご紹介	2
シンポジウム報告	3
研究会報告	8
東アジア文化研究会報告	19
勉強会報告	31
委員会報告	34
講演会報告	39
研究所訪問報告	45
新刊案内	48

2011年7月16日(土)、17日(日)

国際シンポジウム

「日本意識と対外意識」

法政大学市ヶ谷キャンパス 外濠校舎

S405 教室(7月16日)

S305 教室(7月17日)

センター長ご紹介



福田 好朗

法政大学国際日本学研究センター センター長

2011年3月に3年間の任期を終えられた星野勉前常務理事・文学部教授の後任として、4月より、福田好朗現常務理事・デザイン工学部教授が新しく国際日本学研究センター長の職に就かれました。任期はやはり3年間です。国際日本学研究センターは、2002年に国際日本学研究所が設立されると同時に設置され、同研究所と伝統の野上記念能楽研究所、および沖縄文化研究所とを結んで、「国際日本学」の法政大学での展開を支えてきました。今日、「国際日本学」は法政大学の人文科学研究部門でトップランナーの地位を占めます。その責任からも手綱を緩めずに、「日本学」と

「国際化」のさらに新たな出会いを模索していかなければなりません。福田新センター長は、デザイン工学部教授としてはシステムデザインが専門で、また、常務理事としては国際交流も担当しておられ、「日本学」と「国際化」とを新たに結びつけていく際に、人文科学の旧弊には囚われない好舵取りをしていただけるものと期待されます。

【紹介文執筆：安孫子 信】

(法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授)

Introduction of New Director of Hosei University Institute of International Japanese Studies: Professor Dr. Yoshiro Fukuda

On 1st April, Prof. Dr. Yoshiro Fukuda, a Professor of Faculty of Engineering and Design and Vice President of Hosei University, took up the post of Director of Hosei University Institute of International Japanese Studies, succeeding Prof. Tsutomu Hoshino, former Vice President of Hosei University and Director of the institute. Prof. Dr. Fukuda's term as Director is three years as same as Prof. Hoshino. Hosei University Institute of International Japanese Studies was established in 2002 concurrently with that of Hosei University Research Center for International Japanese Studies. Since the beginning, the institute has supported development of "International Japanese Studies" under the cooperation of

the Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University and Hosei University Institute for Okinawan Studies. Now "International Japanese Studies" is a front runner of Hosei University in the research field of humanities. We have to facilitate the development of "Japanese Studies" and seek a way of "Internationalization" to carry out our fundamental responsibility as a front runner. Prof. Dr. Fukuda is a specialist of system design and has charge of international exchanges as Vice President. In this meaning it is expected that Prof. Dr. Fukuda will display great ability to combine "Japanese Studies" and "Internationalization" with a fresh idea.

[Reported by Shin Abiko, Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Hosei University Faculty of Letters]

中心主任介绍

2011年3月，前常務理事・文学部教授星野勉3年任期届满。作为其后任，现任常務理事・设计工学部教授福田好朗从4月开始，履新就任国际日本学研究中心主任，任期依旧为3年。国际日本学研究中心于2002年与国际日本学研究所同时设立，将国际日本学研究所与传统的野上記念能楽研究所以及沖縄文化研究所联合起来，对“国际日本学”在法政大学的推进起到了重要的支撑作用。如今，“国际日本学”已经在法政大学人文科学研究部门

中占据了头号的位置。面对这一责任容不得半点松懈，必须进一步探索“日本学”与“国际化”的崭新融合。福田新主任作为设计工学部的教授，其专业为系统设计，并作为常務理事负责国际交流，在将“日本学”与“国际化”向纵深结合之际，相信福田主任能够成为不囿于人文科学旧弊的优秀舵手。

【介绍文执笔：安孙子 信】

(法政大学国际日本学研究所所长・文学部教授)

센터장 소개

2011년 3월, 3년간 임기를 끝내신 전 상무이사 호시노 쓰토무(星野勉・문학부) 교수의 후임으로 4월부터 현 상무이사인 후쿠다 요시로(디자인공학부) 교수가 국제일본학연구소센터 센터장으로 새롭게 취임하셨습니다. 임기는 역시 3년입니다.

국제일본학연구소센터는 2002년, 국제일본학연구소 설립과 동시에 설립되어, 동 연구소와 전통문화연구소인 노가미기넨노가쿠(野上記念能楽)연구소 및 오키나와(沖縄)문화연구소와 함께 호세이대학에서 ‘국제일본학’ 전개를 지지해왔다. 현재 ‘국제일본학’은 호세이대

학 인문과학 연구부문에서 선두의 지위를 차지하고 있으며 이러한 책임감으로 고삐를 늦추지 말고 ‘일본학’과 ‘국제화’의 더욱 새로운 만남을 모색해 나가야 할 것이다.

신임 후쿠다 센터장은, 디자인공학부 교수로서는 시스템디자인을 전공하고 계시며 또한 상무이사로서는 국제교류를 담당하고 계신다. ‘일본학’과 ‘국제화’를 새롭게 결합시켜 나아갈 때 인문과학의 구계에 얽매이지 않는 좋은 지휘자 역할을 해주시기를 기대한다.

【소개문 집필: 아비코 신】

(安孫子信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장・문학부 교수)

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ①「〈日本意識〉の変遷—古代から近世へ」

第一回シンポジウム

日本意識の時空

●日 時：2011年2月26日(土) 13:30～18:20
2月27日(日) 10:30～17:30

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25階 B会議室

●司 会：田中 優子(法政大学社会学部教授)

今回のシンポジウムの統一テーマは「日本意識の時空」である。今までの研究会では、国号の決定過程や範囲の変遷が議論のテーマとなった。本プロジェクトが研究対象とする「範囲」とは、法的な意味での「国境」のみならず、自らのアイデンティティの認識する範囲であり、風土、風景および、日常的に使用する地図などに及ぶ。そこで今回は、地図、文様、風土、風景から見えるもの、時代や時間の経過から見えるものなど、具体的なかたちを、日本意識の表れとして読み解いてみることにした。

坂本勝「〈原万葉〉における〈ヤマト〉の風景」

『万葉集』のうち「原万葉」即ち巻1の1～53番を考えることによって、国号成立期(7世紀後半)の風景を見ようという試みであった。そのころのヤマトの範囲は、三輪山の麓、奈良盆地全体、現在の奈良県一帯、日本全体など、複数の空間を意味したと思われる。例えば原万葉の巻1の1、泊瀬朝倉宮時代の天皇の御製の一部に「そらみつ山跡乃国 おしなべて われこそ おれ しきなべて われこそいませ」とある。ここには狭い範囲のヤマトを、広い範囲に「おしなべて」「しきなべて」ゆく意識が見られる。原万葉の巻1の2、高市岡本宮時代の御製には「くにはら」「うなばら」が見え、日本全体を「見て」いることがわかる。巻1の52では、藤原宮を東西南北の中心に位置するものとみなし、宇宙構造の真ん中にあると捉える。彼らは、天地、東西南北の広大な宇宙を描く視線を手に入れた。宇宙とつながる国家の空間を、神々が作っていた山々、自然との関係で作り上げたのではないか。

小秋元段「日本意識の変遷—中世の文学作品を中心に—」

「神国意識」が長らく存在するのはなぜか? という疑問を提起した。『今昔物語』『古事談』『続古事談』『平家物語』『江談抄』などから、中世の日本人が中国を「大国」とした「小国」意識、「粟散国」意識をもっていたことを明らかにした。またそれとは別に、吉備真備、小野篁、紀長谷雄、大江朝綱、大江匡房など、中国人もねたむような「すごい日本人がいる」という物語も作られてきた。さらに、日本の優等性を主張する『神皇正統記』などが「大日本は神国なり」とした。しかしそれらの意識とは全く別に、『愚管抄』に見られるように、日本や皇統を絶対視しなかった慈円の存在に注目すべきであると、中世の複数の視点を提示した。

竹内晶子「世阿弥能にみる日本意識」

世阿弥の能が日本をどう描いているかと、異国素材をどう取り入れているか、に注目して分析した。日本の

描き方は「穏やか」「静かな四方の波、海、風」「国土豊か、安全」「平らか」など、全体に平穏であることが強調されている。また、能には異国を舞台とする作品があるが、世阿弥はそれを作らなかった。『風姿花伝』に、唐事は衣装や音楽ではなく、出で立ちのみで表現するように、と書いた。中国の故事を扱う場合も日本を舞台にし、和歌や物語を取り入れて翻案した。漢語もできるだけ使用しなかった。これらの方法が、世阿弥が「幽玄」を作り上げたことと関連するのではないか。

彭丹「日中陶磁器における龍文」

中国の陶磁製造が王権と強く結びつけられていたことを前提にして、皇帝のトートেমである龍が日本ではどのように扱われたかを陶磁器に限って考察し、そこから日本における王権の性格を捉えようとした。日本では陶磁器が茶の湯によって発展し、南宋、元、明のものが輸入されて使われ、日本でも作られるようになったが、中国のような(天皇の)官窯は存在しなかった。龍に相当する天皇のシンボルも陶磁器に登場することはなかった。これは陶磁器が王権と関連せず茶の湯の文化としてのみ発展したという理由もあるが、天皇王権の弱さをも表しているのではないか。

横山泰子「ナショナルかローカルか、もしかしてネイティブ?—ノスコ著『江戸社会と国学』の翻訳作業をふりかえって思うこと—」

ピーター・ノスコの著書を翻訳した経験から、「国学」の英訳 nativism に注目し、「日本意識」を native consciousness という概念で考えることを提案した。native、nativity という概念すなわち、「生まれ」や「故郷」と、「日本」との一致、不一致の問題が研究対象として重要であることを問題提起した。質疑応答の中ではさらに、国の中央は native と nation が一致しやすく、地方では一致しにくいという問題や、中国や韓国では生まれの土地ではなく祖先が native として認識されることと比較すべきであることなどが提起された。

米家志乃布「地図から見る近世日本意識の変遷」

様々な時代の地図から、日本の形が認識できることを提起した。行基地図は各国(各地方)がたわら型で、それをつなげる形をしている。仏教系の地図はインドの世界観を基礎としており、「国絵図」は、やはり各地方を基準とし、それらをつなげたものである。質疑応答では、道中図が今の地下鉄路線図に相当することが指摘され、地図の研究は、実際に人々が多様な地図をどう組み合わせて使っていたか、の研究になるであろうことが予測された。

2日間のシンポジウムにおける議論では、数々の具体的な提案もされた。主なものとしては、「自らの中のnativismを意識する」「日本意識の主体にもっと注目する」「国内だけではなく西洋との比較でもなく、中国、韓国と比較しておこなうべきである」「特殊（支配層や

知識人）と一般の発想を同時に見る」「植民地の日本意識」「天皇と天皇制」である。来年度より、これらのテーマを組み込んで行く。

【記事執筆：田中 優子（法政大学社会学部教授）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

1st Symposium “Time and Space in Japan-consciousness”

Date: Saturday, 26 February 2011, 13:30-18:20; Sunday, 27 February 2011, 10:30-17:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B
Chair: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

The overall theme of this symposium was “Time and Space in Japan-consciousness”. Previous research meetings had discussed themes such as the process determining a country name, and the limits of change. The “limits”

focused upon in this project do not merely refer to “national boundaries” in a legal sense, but are the “limits” that define an identity, as well as pointing to climate, landscape and everyday maps. The objective here was to detect expressions of Japan-consciousness that can be seen in real terms in maps, motifs, climate and landscape, and in the process of era and time. For this purpose we welcomed presentations from 6 researchers spanning from ancient to pre-modern eras. Discussion during the 2-day symposium put forward many proposals. Mains ones were “Consciousness of nativism within oneself”, “Further awareness of the essence of Japan-consciousness”, “Need for comparison not just within Japan or with the West, but with China and Korea”, “Viewing together of select (rulers and intellectuals) and popular thinking”, “Colonial Japan-consciousness” “Emperor and emperor system”. We plan to include these themes over the next year.

Report by: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

战略研究基础形成支援项目“用国际日本学的方法再讨论——对日认识的过去、现在和未来”

研究方法①“‘对日认识’的变迁——从古代到现代”

第一次研讨会“对日认识的时空”

时 间：2011年2月26日（星期六）13:30-18:20
2011年2月27日（星期日）10:30-17:30
会 场：法政大学市谷校区 布赏那德Tower25层 B会议室
主持人：田中 优子（法政大学社会学部教授）

本次研讨会的主题是“对日认识的时空”。此前的研究会主题是国号的决定过程和范围变迁。而本项研究所指的“范围”，不仅是法定意义上的“国境”，还含括自我

认识、风土、景观以及日常使用的地图等，内涵广泛。因此，本次研讨会的6名研究学者主要通过从地图、文本、风土、景观等，或是时代、时间的经过中看到的具体形式读解“对日认识”，时代跨越从古代到近代。历时2天的研讨会中与会者提出了各种具体意见，例如“认识自我的‘nativism（排外主义）’”、“关注对日认识的主体”、“国内和西方以外，也应进行与中国、韩国的对比研究”，以及“同时关注特殊阶层（统治阶层和知识阶层）与普通阶层的想法”、“殖民地的对日认识”、“天皇、天皇体制”等，这些内容都将作为明年的研究课题。

【执笔者：田中 优子（法政大学社会学部教授）】

전략적 연구기반 형성 지원사업《국제일본학 연구방법에 기초한〈일본의식〉재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래》
연구①〈일본의식〉의 변천-고대에서 근대로

제1회 심포지엄 ‘일본의식의 시공(時空)’

일 시：2011년 2월 26일(토) 13:30 ~ 18:20
2011년 2월 27일(일) 10:30 ~ 17:30
장 소：호세이대학 이치가야캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실
사 회：다나카 유코(田中 優子·호세이대학 사회학부 교수)

이번 심포지엄의 주제는 ‘일본의식의 시공’이다. 지금까지 연구회에서는 국호의 결정과정과 범위 변천이 주된 논의의 대상이었다. 본 프로젝트가 연구대상으로 하는 ‘범위’는 법적 의미인 ‘국경’뿐만 아니라, 자기자신의 아이덴티티 의식 범위, 풍토, 풍경 및 일상적으로

사용하는 지도도 포함된다. 이번 심포지엄에서는 지도, 문양, 풍토, 풍경에서 보여지는 것, 시대와 시간의 경과에서 읽을 수 있는 등, 구체적인 형태를 일본의식의 표현으로 해석하기로 하고, 고대에서 근세에 걸친 연구를 6명의 연구자가 발표했다. 이들간의 심포지엄 토론에서는 여러가지 구체적인 제안도 있었다. 주요 제안으로는 “자기 안의 nativism을 의식할 것”, “일본의식의 주체에 더욱 주목할 것”, “국내만이 아닌 서양과의 비교가 아닌, 중국, 한국과 비교 연구할 것”, “특수(지배층과 지식인)층과 일반인의 발상을 동시에 볼 것”, “식민지의 일본의식”, “천황과 천황제” 등이 있었다. 내년도부터는 이러한 제안을 염두에 두고 연구를 진행해 나갈 것이다.

【기사집필：다나카 유코
(田中 優子, 호세이대학 사회학부 교수)】

国際シンポジウム

日本意識と対外意識

●日 時：2011年7月16日(土)、17日(日)

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 外濠校舎 S405 教室(7月16日)、S305 教室(7月17日)

去る7月16日(土)、17日(日)、法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎において、法政大学国際日本学研究所の国際シンポジウム「日本意識と対外意識」が行われた。

第1日目の会場は外濠校舎 S405 教室であった。まず、シンポジウムの責任者である田中優子氏(法政大学)による趣旨説明の後、石上阿希氏(立命館大学、大英博物館)と岩崎均史氏(たばこと塩の博物館)による研究発表、小林ふみ子氏(法政大学)によるこれまでの研究のまとめ、そして討論が行われた。また、第2日目には、ロナルド・トビ氏(イリノイ大学)による記念講演、タイモン・スクリーチ氏(ロンドン大学 SOAS)、大木康氏(東京大学)、川村湊氏(法政大学)による研究発表、渡辺浩氏(法政大学)によるコメントと発表者との質疑応答、そして場内からの質疑応答が行われた。シンポジウムの概要は以下の通りである。

第1日目の最初の発表者である石上氏の論題は「春画をめぐる対外意識—春画を作る、見る—」であった。具体的には、平安時代には偃息図と呼ばれる性的な題材を描く絵が存在しており、その頃から「性器の極端な強調」という特徴を備えていること、「男性を天、女性を地とする」という考えがあったこと、『黄素妙論』の利用やその他漢籍の引用などによって「中国に起源をもつ」ということを強調することで春画の正統性を示そうとする、という日本の春画の特質が、資料に基づき明らかにされた。

江戸時代には、印刷技術の発展によって春画を鑑賞する層が支配階級から庶民へと広がる中で、神の和合によって始まった国として男女の和合を神の道に叶うものとする言説が行われ、幕府による取り締まりが行われたものの、春画そのものは人々にとって恥ずべきものではなく珍重されるべきものであったことが指摘された。それが明治時代になると春画が猥褻物となり、現在に至るまで日本においては公的な美術館、博物館が「春画展」を行うことが難しい、という状況も報告された。

続く岩崎氏の発表は「近世庶民に於けるアルファベット受容の傾向～ABCD(アベセデ)の魅惑」と題して行われた。江戸時代におけるアルファベットとの「出会い」は17世紀末のローマ数字を漢数字に置き換える作業から始まり、その後、アルファベットの筆記体風の図柄を衣装として用い、あるいは「いろは四十七文字をアルファベットで表記する」といった、「ごく僅かのアルファベットを読める人には作者の意図が分かり、大部分のアルファベットを読めない人には異国風という印象を与える」という「仕掛け」により、アルファベットは江戸時代の日本人の一部の間で享受されるようになったことが紹介された。

しかし、後代になると、アルファベット受容の初期に見られた「正確な模写」に代わり、「異国の雰囲気を出す」ということが主な目的となり、アルファベットの

表記が不正確になって「異国風」というイメージのみが残る、という状態が明治時代を迎えるまで続くことになった、という事実も示された。

「春画」と「アルファベット」という二つの要素を通して、近世の日本人にとって中国と西洋は同次元にはないことが示されたことが、この日の発表の成果であった。

第2日目は外濠校舎 S305 教室を会場として行われた。

この日は、まずトビ氏による記念講演「日本中・近世の異国・異邦人」が行われた。「日本」を認識するためには、まず非「日本」として表象された他者を認識しなければならない」という観点に基づき、最初に外との関わりを示す日本の神話を外に出て何かを持ち帰る「桃太郎型」と外から歓迎されざる他者が来航する「白楽天型」の二つの類型に分類し、倭寇や蒙古襲来、キリシタンの来航などが「白楽天型」に属することが論じられた。次に、絵画を対象として、古代から中世あるいは前近世までは、日本の絵画には唐土の風景を描く作品はあるものの、日本の地に異国の人物を描くのは例外的であることが示された後、南蛮人の渡来以降は長崎や京都において異国人が往来することが日常的になったため、絵画の中に唐以外の異国の人物が多く登場するようになり、この点に日本における対外意識の変化の一端が現れている、という指摘がなされた。

これに続き、南蛮人の登場が「本朝、唐、天竺」という伝統的な三国世界観にいかなる影響を与えたかが検討された。その結果、当初、日本の人たちはヨーロッパから渡来した人々を三国世界観に当てはめて「天竺人」として捉えたが、マテオ・リッチの『坤輿万国全図』などが紹介されることで世界が「本朝、唐、天竺」ではなく「万国」からなるという認識が生まれたため、16世紀末から17世紀になると、「三国」ではない「万国」の人が絵画に登場するようになったことが紹介された。また、後には、日本の人々が「月代、髭なし」を強制されたことの反映として、異国人を描く際には髭が強調され、それが「非日本人」としての特徴となったこと、そのため異国人相互の区別はかなり曖昧であったことが指摘された。

こうした日本の自己認識の変化が、他者としての異国の認識に変化をもたらしただけでなく、「他者があつての自己認識、異国があつての日本意識」という構造が成り立つことが、今回の講演であらためて確認されたのであった。

午後に行われた3件の研究発表の最初はスクリーチ氏の発表「メント・モリと吉祥画の出会い」であった。この発表では、江戸時代において吉祥画とメント・モリが比較されるような接触を持った3度の機会を取り上げ、吉祥画とメント・モリとの相違が検証された。取り上げられたのは、(1) 大目付井上政重が明暦の大火(1657年)で所有していた絵画を失った将軍家のためにオランダ商館に絵画の制作を発注した事例、(2)

徳川吉宗がオランダ商館に「ヨーロッパで一番有名な画家に絵を描いてもらいたい」という依頼を出し、5点が献上された事例、(3)江戸に滞在していたオランダ商館長の快気祝いの席に掛けられた絵を巡る日本人との問答を記録した司馬江漢の記事の事例、であった。

これらの具体的な事例により、「死を忘れないため」にメメント・モリを用いる西洋人と、「死を忘れるため」に吉祥画を用いる日本人との間に存する絵画に対する理解と態度の違いが指摘された。その中で西洋絵画の公開が身分や階層を強く意識して行われたことが明らかにされたのも興味深い。

大木氏の発表は、「江戸時代人の対中意識—「漢」と「唐」をめぐる—」と題して行われた。漢文や漢籍といった「古典としての中国」を「漢」、「同時代的、具体的な中国」として「唐」の言葉を用いる江戸時代の通例に基づき、「唐」が江戸時代の人々にどのように捉えられていたかが、言語、絵画、音楽の三点から分析された。その結果、江戸時代の人々が同時代の中国語としての「唐話」に触れる主な機会として、(1)黄檗宗、(2)禅宗の語録、(3)朱子の発言をまとめた『朱子語類』、(4)古文辞学、(5)岡嶋冠山らの『唐話纂要』などによる唐話学、(6)白話小説の受容、(7)明清交替時に日本に亡命した知識人との接触、が挙げられた。また、「唐人の寝言」という表現が意味不明の言葉を指して用いられ、遊びとして「唐言」が行われたりなどと、「唐話」が「非日本語」としてさまざまな形で享受されたことが紹介された。

また、絵画の場合には、同時代の中国の人々の様子が版本として広く流通したことが提示され、音楽については、明清楽が知識人の間で流行し、日清戦争の頃まで月琴の師匠が月琴の教授で生活が出来る程度に需要があったことが示された。

このように、江戸時代の人々にとって「唐」的な世界は比較的深く浸透していた。本居宣長のいう「漢意」が外在的な中国そのものではなく、日本において千年間にわたっておこなわれた読書の蓄積によって内在化された抽象的な存在としての中国であったことが示すように、「漢」と「唐」という二分法による中国認識は、江戸時代における「日本人」が「相手をどのようにみるか」という意識であり、それは鏡としての「日本意識」

そのものであるといえること、そして、「日本意識」の鏡として「中国」が存在したことが指摘された。

「神国日本・震災日本」と題して行われたのが、川村氏の発表であった。「くらげなす漂へる」という『古事記』の冒頭の一節や、高天原からみたときに中つ国が禍々しいところであった、という記述が示すように、「不定型で危ない国」としての日本という認識は、神話における「国生み」や「国寄せ」という考え方が「震災や災害のさきわう国」の含意であり、江戸時代の鯨絵も「日本は災害のある国」という自己認識に基づいていることが示された。このような自己認識は、現代においては小説や漫画という形式を取って表現され、具体例として井伏鱒二の『青ヶ島大概記』、『ジョン万次郎漂流記』、『黒い雨』、あるいは村上春樹の『神の子どもたちはみな踊る』といった小説、望月峯太郎の『ドラゴン・ヘッド』や永井豪の『バイオレンス・ジャック』、あるいは大友克洋の『AKIRA』などの漫画が取り上げられた。

このように、『古事記』から現代の『ドラゴン・ヘッド』に至るまで、「日本は災害の多い国」という日本人の自己認識は比較的正しいものであるが、「科学的に安全」という態度が「震災日本」という事実を等閑視させることになったのであり、3月11日に起きた東日本大震災を契機として、われわれはあらためて日本に対する自己認識を適切に抱く必要がある、という指摘がなされた。

17時5分からは、田中優子氏(法政大学)を司会者、渡辺浩氏(法政大学)をコメンテーターに迎え、発表者に対する質疑応答が行われ、最後に会場の参加者からの質問や意見とそれに対する回答がなされ、2日間にわたる国際シンポジウムは閉幕となった。

この2日間を通して、学際的な国際日本学において「日本意識」を対象とした研究を行うにあたって、「日本意識」だけではなく、他者としての「異国」あるいは「世界意識」を常に念頭に置くことが不可欠であり、それによってより多層的、複眼的な研究がなされることがあらためて示されたといえるであろう。

【記事執筆：鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project
Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’:
from Ancient to Early Modern Eras”

International Symposium

“Japan-consciousness and International consciousness”

Date: Saturday, 16 and Sunday, 17 July 2011

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Sotobori
Building: Room S405 (16 July); Room S305 (17
July)

The International Symposium of the Hosei University Center for International Japanese Studies, “Japan-consciousness and International consciousness” was held on Saturday, 16 and Sunday, 17 July in Hosei University Ichigaya Campus Sotobori Building.

Following an explanation of intent by symposium leader, TANAKA Yuko, we heard research presentations from ISHIGAMI Aki (Ritsumeikan University/British Museum) and IWASAKI Hitoshi (Tobacco and Salt

Museum), which were summarized by KOBAYASHI Fumiko (Hosei University) and discussed. The second day hosted the keynote speech by Ronald TOBY (University of Illinois), and research presentations from Timon SCREECH (University of London), OKI Yasushi (University of Tokyo) and KAWAMURA Minato (Hosei University), which were followed by comments by WATANABE Hiroshi (Hosei University) and questions and answers from the presenters and then these were opened up to the floor.

Over the 2 days we were shown an essential element in order to carry out research focusing on ‘Japan-consciousness’ within the academic field of international Japanese studies: it is necessary in all cases to consider additionally the counterpart of ‘Japan-consciousness’ of ‘other country’ or ‘world-consciousness’.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目研究方法①“‘对日认识’的变迁——从古代到现代”

国际研讨会

对日认识与对外意识

时 间：2011年7月16日（星期六）、17日（星期日）

会 场：法政大学市谷校区外濠校舍S405教室（7月16日）、S305教室（7月17日）

7月16日（星期六）、17日（星期日），国际日本学研究所主办的“对日认识与对外意识”国际研讨会在法政大学市谷校区外濠校舍举行。

首日会场设在外濠校舍S405教室。研讨会负责人田中优子教授（法政大学）先对此次会议的主旨进行了说明，

其后由石上阿希教授（立命馆大学、大英博物馆）、岩崎均史教授（烟草和盐博物馆）以及小林文子教授（法政大学）分别作了研究报告，并展开讨论。第2天除了Ronald P. Toby（伊利诺伊大学）的纪念讲演外，Timon Screech（伦敦大学）、大木康（东京大学）、川村湊（法政大学）等研究学者也先后作了报告，同时渡边浩教授（法政大学）则对发表内容做出评论，现场还展开了参加者答疑。

通过为期2天的研讨，与会者认为国际日本学学科研究“对日认识”时将作为第三方的“异国”或“世界认识”纳入视野必不可缺。

【执笔者：铃村 裕辅

（法政大学国际日本学研究所客座学术研究员）】

전략적 연구기반 형성 지원사업《국제일본학 연구방법에 기초한〈일본의식〉제검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래》

연구①〈일본의식〉의 변천-고대에서 근대로

국제 심포지엄

‘일본의식과 대외의식’

일 시：2011년7월16일(토)·17일(일)

장 소：호세이대학 이치가야 캠퍼스 소토보리(外濠) 교사 S405호 강의실 (7월16일)

S305호 강의실 (7월17일)

호세이대학 국제일본학연구소 국제심포지엄 ‘일본의식과 대외의식’이 7월16일(토)·17일(일)，호세이대학 이치가야 캠퍼스 소토보리교사에서 열렸다.

첫날 회장은 S405호 강의실이었다. 먼저 심포지엄 책임자인 다나가 유코(田中優子, 호세이대학) 교수가 취지를 설명한 후 이시가미 아키(石上阿希·리스메이관(立命館)대학·대영박물관) 교수와 이와사키 히토시(岩

崎均史·다바코토시오(담배와 소금) 박물관) 씨의 연구 발표에 이어 고바야시 후미코(小林ふみ子·호세이대학) 부교수가 발표를 정리하고, 토론이 진행됐다. 둘째날은 로널드 토비(일리노이대학) 교수가 기념강연을, 타이몬 스크리치(런던대학) 교수, 오오키 야스시(大木康·도쿄대학) 교수, 가와무라 미나토(川村湊·호세이대학) 교수의 연구 발표, 와타나베 히로시(渡辺浩·호세이대학) 교수의 논평과 발표자 간 질의응답, 그리고 심포지엄 참가자와 발표자 간의 질의응답으로 진행되었다.

이들간의 심포지엄을 통해, 학제적 연구분야로서 국제일본학이 ‘일본의식’을 연구대상으로 하기 위해서는 자국의 ‘일본의식’ 뿐만 아니라, ‘이국’(異国) 또는 ‘세계의식’을 항상 염두에 두어야 한다는 것이 확인됐다.

【기사집필：스즈무라 유스케

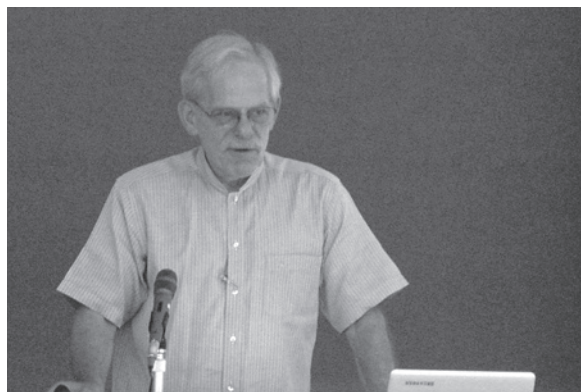
(鈴村 裕輔, 호세이대학 국제일본학연구소 객원학술연구원)】



田中 優子 教授



会場の様子



記念講演：ロナルド・トビ 教授（伊利ノイ大学）



パネルディスカッションの様子

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ②「近代の〈日本意識〉の成立」

日本民俗学・民族学の貢献 ―昭和 20-40 年代まで―

- 日 時：2011 年 5 月 20 日（金）、21 日（土）
6 月 10 日（金）、11 日（土）
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 26 階 A 会議室
法政大学九段校舎 3 階 遠隔講義室
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼任所員、国際戦略機構特別教授）

戦略的研究基盤形成支援事業「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討―〈日本意識〉の過去・現在・未来」研究アプローチ②の今年度の最初の二つの研究会は、5 月 20 日・21 日及び 6 月 10 日・11 日の 4 日間にわたって開催された。昨年度討論してきた、昭和 10 年代の両みんぞく学の「多民族国家の大日本帝国及びその内地及び植民地における日本意識の形成」をテーマとして継承して、今年度は昭和 20 年から 40 年代頃までの両学問分野の発展を報告し、討論することにした。研究プロジェクト参加者は昨年度とほぼ同じで、海外からはアメリカのスタンフォード大学のベフ・ハルミ名誉教授、プリンストン大学のエミー・ボロバイ准教授、韓国ソウル国立大学校の全京秀教授が参加し、国内の研究者としては、新たに、桜美林大学の中生勝美教授、元一橋大学教授の長島信弘氏、東北大学の杉山晃一名誉教授、熊本県立大学の大島明秀教授の四名に入って頂いた。戦後間もなく、旧植民地の帝国大学あるいは諸外国にあった日本の研究機関から引き揚げてきた研究者は、外地での経験等を日本国内でどういかに民族学あるいは民俗学を確立し発展させてきたか、という点は、20 世紀後半に著しい発展をみせた文化人類学や民俗学の学史を理解するための重要な研究課題である。特にアメリカ占領下の日本においては、GHQ の CIE 民間情報及び教育局の調査で果たした研究者の役割は重要である。そのような研究者が学んだアメリカの文化人類学、社会人類学の方法論あるいは調査の仕方に、「日本とは何か」という定義づけに直面するにあたって大きな意味があったことは確かである。そこで活躍した研究者、例えば石田英一郎、岡正雄、梅棹忠夫の活動と、柳田国男との研究交流と対峙について、何人かの研究プロジェクト参加者から報告された。特に 5 月の研究会では、東京大学文化人類学研究室設立をめぐる状況が、当時の一期生や二期生の研究者による報告や討論により、これまで以上に明らかに。二回目となる 6 月の研究会では、神奈川大学の川田順造特別招聘教授もこ

の点を取り上げ、当時の様子を克明に報告された。なお、6 月の研究会の前半（6 月 10 日（金曜日）夕方）は、法政大学を初の会場として開催された日本文化人類学会第 45 回研究大会を記念するかたちで、シンポジウム形式での発表となった。大勢の出席者から大変良い反響を頂いた。

法政大学は、柳田国男先生はじめ、多くの研究者を教員に招いた歴史がある。石田英一郎先生は 10 年にもわたって法政大学で教鞭をとっていた。元総長を務めた中村哲先生は台湾や沖縄研究と深いかわりがあった。そのような背景を踏まえ、このアプローチ②の研究が法政大学における文化人類学及び民俗学の研究にも刺激を与えることができると考えている。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー

（法政大学国際日本学研究所兼任所員・国際戦略機構特別教授）】



左から 清水昭俊 氏、エミー・ボロバイ 氏、中生勝美 氏、ハルミ・ベフ 氏、金京秀 氏、石井正己 氏、ヨーゼフ・クライナー アプローチリーダー、福田アジオ 氏、杉山晃一 氏、近藤雅樹 氏、山崎幸治 氏、小谷凱宣 氏



左：クライナー 教授、
右：全京秀 教授（国立ソウル大学校）



杉山 晃一 東北大学名誉教授



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 2 “Establishment of Modern ‘Japan-
consciousness’”

“Contribution of Folklore Studies and Ethnology: Showa 20s-40s”

Date: Friday, 20-Saturday, 21 May; Friday,
10-Saturday, 11 June 2011
Venue: Hosei University Ichigaya Campus, Boissonade
Tower 26F Conference Room A; Hosei University
Kudan Building 3F Remote Conferencing Room
Chair: Josef KREINER (Staff Member, Hosei
University Research Center for International
Japanese Studies; Professor and Special Adviser,
Planning and Strategy Division)

The first two research meetings this year of the
Strategic Research Base Development (Grant-aided)
Project « Re-examining ‘Japan-consciousness’ based
on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-
consciousness’ in the Past, Present and Future » Research
Approach 2, were held over four days on 20-21 May
and 10-11 June. Following on from last year’s theme of

the “Formation of Japan-consciousness in the multi-
ethnic Japanese empire and its colony”, we discussed
the developments of both specialist fields during the
Showa 20s-40s. We saw the same participants in the
research project as last year, with two from America and
one from Korea, and five additional new members from
Japan. The way in which folklore studies and ethnology
were established and developed out of experiences etc.
of scholars leaving the former colonies soon after the
war, is an important matter for research in understanding
the history behind the rapid development of cultural
anthropology and folklore studies etc. during the
second half of the 20th century. The first half of the
June research meeting (10 June [Friday] evening) took
the shape of symposium presentations to mark the 45th
research conference of the Japanese Society of Cultural
Anthropology held for the first time at Hosei University.
We were received well by the many who attended.

Report by: Josef KREINER (Staff Member, Hosei
University Research Center for International
Japanese Studies; Professor and Special Adviser,
Planning and Strategy Division)

战略研究基础形成支援项目 研究方法②“近代‘对日认识’
的成立”

“日本民俗学 民族学的贡献——昭和 20至40年代”

时 间：2011年5月20日(星期五) - 21日(星期六)
6月10日(星期五) - 11日(星期六)
会 场：法政大学市谷校区 布赏那德Tower 26层A会
议室
法政大学九段校区3层 远隔讲义室
主持人：Josef Kreiner (法政大学国际日本学研究所
兼任研究员、国际战略机构特别教授)

战略研究基础形成支援项目“用国际日本学的方法
再讨论——对日认识的过去、现在和未来”研究方法②
本年度最初的2次研究会于5月20日、21日及6月10日、11日
分4天举行。延续去年的研讨课题——昭和10年民族学“作

为多民族国家的大日本帝国、内地及殖民地“对日认识”
的形成”的同时，本年度还就昭和20到40年代两学科的发
展进行了讨论。成员与去年基本相同，2名美国、1名韩
国学者，加上日本国内研究人员共5位。战后从旧殖民地
返回日本本土的研究者是如何基于在国外生活经验确立
起民族学和民俗学的？这一过程对于理解20世纪后半期
获得显著发展的文化人类学和民俗学史具有极其重要的
意义。

另外，为纪念首次在法政大学会场举办的日本文化
人类学会第45届研究大会，6月研究会的前半段(6月10日
下午)还举行了报告研讨会。该报告会吸引了众多参加者，
收效良好。

【执笔者：Josef Kreiner
(法政大学国际日本学研究所兼任研究员·国际战略机构特别教授)】

전략적 연구기반 형성 지원사업 《국제일본학 연구방법에 기초
한 <일본의식> 재검토—<일본의식>의 과거·현재·미래》

연구② 근대 <일본의식>의 성립

일본 민족학·민족학의 공헌 - 1945~1965(昭和 20~40)까지

일 시：2011년 5월 20일(금)~21일(토)
2011년 6월 10일(금)~11일(토)
장 소：호세이대학 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워
26층A회의실
호세이대학 구단(九段)교사 원격강의실
사 회：요셉 클라이너(호세이대학 국제일본학연구소
겸임연구원·국제전략기구 특별교수)

전략적연구기반 형성지원사업《국제일본학 방법에 기
초한 <일본의식> 재검토—<일본의식>의 과거·현재·
미래》연구②는 5월 20일, 21일 및 6월 10일, 11일, 4일
에 걸쳐 개최됐다. 지난해 토론했던 1935년대(昭和10년

대) 민족학과 민족학의 ‘다민족 국가 대일본제국, 그 국내
및 식민지의 일본의식 형성’을 테마로 계속해서 올해는
1945~1965(昭和20~40)경까지의 두 학문 분야의 발전
을 보고하고 토론하기로했다. 연구 프로젝트 참가자는 지
난해와 거의 같은 멤버로, 미국에서 2명과 한국에서 1명,
국내에서는 작년 멤버에 5명이 더 참가해 주었다.

태평양전쟁후 구(旧)식민지에서 귀환한 연구자가 해외
에서의 경험을 어떻게 살려서 어떻게 민족학·민족학을
확립시키고 발전시켰는가는 20세기 후반 눈부시게 발전
한 문화인류학과 민족학 역사를 이해하는 데 중요한 연구
과제이다. 특히 6월 연구회(6월 10일(금)저녁)는, 호세이
대학에서는 처음 열린 일본문화인류학회의 제45회 연구
대회를 기념하기 위해 심포지움 형식으로 진행됐다. 많은
참가자들로부터 큰 호응을 얻었다.

【기사집필：요셉 클라이너
(호세이대학 국제일본학연구소 겸임연구원·국제전략기구 특별교수)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ①「〈日本意識〉の変遷—古代から近世へ」

第2回研究会

●日 時：2011年1月8日(土) 13:00～17:00

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室

●司 会：田中 優子(法政大学社会学部教授)

去る2011年1月8日(土) 13:00～17:00、法政大学国際日本学研究所セミナー室において、研究アプローチ①第2回研究会が開催された。今回は、前年にアルザス・シンポジウムで講演をおこなったその内容を軸に、日本国号の起源、および近代の政治思想のありようを、国内の研究者に投げかける発表であった。なお本アプローチでは、国際日本学インスティテュートの博士後期課程学生で国際日本学研究所学術研究員である者や、博士号取得者で研究所客員学術研究員である者に、積極的に研究に参加してもらう方針をとっている。今回はその中の二人より、近代思想、近代文学からの問題提起をもらった。報告の概要は以下の通りである。

小口雅史(法政大学文学部教授)による『国号「日本」(にっぽん)「日の本」(ひのもと)の起源とその意味』では、「ひのもと」の意味について、現在出ている議論を紹介しながら、問題提起がおこなわれた。

戦後、天皇制の議論はあったが、国号の議論はなかった。網野善彦は、天武朝に「日本国」ができたと言っているが、中世では「日本」ではなく「大日の本国」と言われた時代もあった。日本という呼称は国辱的なものであったとも言われる。従って現在の「日本」という呼称についても、改めて国民的合意を形成する必要があるのではないか、という議論も存在している。

中世の資料には「日の本将軍」という称号が出現する。これは蝦夷地の将軍つまりアイヌを支配する北日本の支配者、という意味で使われる場合と、日本全体の将軍という意味がある。「日の本」とはこの場合、日本の北方という意味と、中国から見た場合の「東にあるもう一つの中心」という意味になる。後者で考えると、中国から自立しようとする強烈な国家意識がうかがえる。自立の意識ということから言えば、ヤマトに対する東方世界(具体的には蝦夷地)を中世では「日の本」と呼んだ、という仮説がある。

しかし「日本」という言葉に辺境意識はなかったのか? 701年の直前あたりに、「倭」という言葉が嫌われ「日本」という言葉ができた。東の天皇、西の皇帝という意味があり、日本が単純に「東の国」という意味であるなら辺境の意味はないが、それは真実か? それと同時に、「日本」が他称か自称か、という問題もある。「東夷の極」の意味をもって中国によって名付けられた「日本」を、日本人は受け入れたのではないか。日本は唐を蛮国とはせず「隣国」と位置づけ、自ら東夷の極という位置を受け入れ、日の本は形成された、と考えられる。また日本の中でも、東北異域の意味で「日の本」が設定されていた。

鈴村裕輔(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)『戦間期における石橋湛山の日本意識』は、石橋

湛山が日本をどのように見ていたか、日本のあるべき姿をどのように考えていたか、日本の現状をどのように理解していたか、という三点を軸に展開した。それぞれについての湛山の考えは、第一に、国家は一つの事業体であること、第二に、その国家は小日本主義をとるべきであること、そして第三に、決して日本は東洋の盟主とはならないこと、であった。

湛山の考えでは、植民地交易に比べ対等な貿易の方が経済的には有利であるならば、植民地は手放すべきであった。日本の政策をそのような合理的な経済の方向に転換することで、他の植民地利用国が、有徳の日本を模範にするような国にすべきである、と湛山は考えていた。日本の文明は欧米の文明をもとにし、独自の理想をもっていなかったが、そのことをみつめつつ、湛山は、当時の神話的な国家観とは正反對の、合理的な「企業体」としての国家観をもっていたという。

高橋寿美子(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)『「日本近代文学」成立過程における異文化の興亡——「江戸」対「非江戸」』では、日本近代文学史からめれた明治文学の潮流が詳しく紹介された。その潮流とは、「江戸風文学」である。江戸風文学の特徴は「洒落ッ気」であった。それは江戸文人が江戸でおこなっていた文学および会合の特徴である。この特徴は明治になると、東京出身者によって担われた。しかしそのような「遊びの要素」を失うことによって、近代文学は成立した。それは、文学者の地位が低く、近代化にともなって芸術としての文学を作り上げる必要に迫られたからである。地方から東京に出てくる人々にとって江戸文学は不真面目に思えた。近代化の動きのひとつに、地方から東京への人の移動も考えるべきで、そのような観点から文学史の見直しが必要である。

さらに議論では、『ぼっちゃん』に見える佐幕派や会津藩、明治維新の敗北者への鎮魂などのテーマについて意見が出たほか、文壇にみられる人の関係や社会の構成、下級武士の世界へも注目が必要であること、また、当時の漢詩文の広がりやどう考えるかなど、様々な意見交換があった。東京集中が起こり、上方が凋落し、国家のかたちが変わるとき、日本意識にどのような変化があったかは、今後の課題である。

またこの後、各時代でどのようなテーマと取り組むことが可能か、様々な案が出された。古代では、宗教観念、漢文の共有と各国の文化、大陸から導入された音楽、言葉、服飾、律令における日本独自の展開を、具体的に研究可能である。中世では注釈書研究、『三国伝記』などの物語研究が必要で、近世では年表や地図、統治法などが今後の課題として出された。また研究に際して考慮すべき現代の課題として、ナショナリズムと

日本意識の違いについても考えておく必要があることや、ノンフィクション、各種日本文化論や時代小説研究なども、研究対象にしてよいのではないか、という

意見が出た。

【記事執筆：田中 優子（法政大学社会学部教授）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

2nd Research Meeting

Date: Saturday, 8 January 2011, 13:00-17:00
Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies seminar room
Chair: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

OGUCHI Masashi (Professor, Hosei University Faculty of Letters) discussed the issues of country names in his *Origins and Meanings of the Names for Japan: “Nippon” and “Hinomoto”*. During the medieval period Japan was called “Dainichi no Honkoku”. The name “Hinomoto Shogun” has also been revealed in medieval documents. “Nippon”, the name given by China meaning “barbarians of the furthest east” would appear to have been adopted by the Japanese themselves.

战略研究基础形成支援项目“用国际日本学的方法再讨论——对日认识的过去、现在和未来”

研究方法①“‘对日认识’的变迁——从古代到现代”

第2次研究会

时 间：2011年1月8日（星期六）13:00-17:00
会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层、国际日本学研究所演習室
主持人：田中 優子（法政大学社会学部教授）

此次研究会中，小口雅史（法政大学文学部教授）在题为“国号‘日本’、‘日（太阳）之本’的起源及意义”的报告中讨论了日本国号起源的问题。中世纪日本国号为“大日（太阳）之本国”。且当时的历史资料中曾多次出现过“日（太阳）之本将军”的称谓。“日本”是中国取“东夷之极”之意而命名的，日本人显然接受了这一称号。

전략적 연구기반 형성 지원사업《국제일본학 연구방법에 기초한〈일본의식〉재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래》

연구①〈일본의식〉의 변천-고대에서 근세로

제2회 연구회

일 시：2011년 1월 8일(토) 13:00 ~ 17:00
장 소：호세이(法政)대학 이치가야캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
사 회：다나카 유코(田中 優子·호세이대학 사회학부 교수)

오구치 마사시(小口雅史·호세이대학 문학부 교수) 교수는 ‘국호〈일본(닛폰)〉, 〈히노모토(日の本)〉의 기원과 그 의미’라는 주제로 국호문제에 대해 논했다. 중세에는 ‘일본’이 아닌 ‘다이니치노혼코쿠(大日の本国·밀교에서 최고 절대적 존재인 대일여래가 있는 나라)’라 했고, 중세 자료에도 ‘히노모토쇼군(日の本將軍·해가 뜨는 곳을 지배하는 장군)’이라는 칭호가 출현한다. 중국에 의해 지어진 ‘도우이노코쿠(東夷の極·동방의 야만족)’라는 의미인 ‘일본’을 일본인은 받아들인 것이 아닌가라고 추측된다.

SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies) introduced Ishibashi Tanzan’s idea of “the ideal Japan” in *Ishibashi Tanzan’s Notion of Japan in the interwar Period*. Tanzan stood for non-colonial Japanism and against hegemony in the East. He also held a view of the nation as an economic “corporate entity” in direct opposition to the contemporary spiritual view of the nation.

TAKAHASHI Sumiko (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies) introduced in detail the trend of Meiji literature within Japanese modern literary history in *The Fate of Other Culture in the “Japanese Modern Literature” Creation Process: “Edo” versus “Anti-Edo”*. The trend in question is “Edo-style literature”. This is related to the movement of people from outlying areas to Tokyo and Tokyo centralism that accompanied modernization, necessitating a review of literary history from this perspective.

Report by: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

铃村裕辅（法政大学国际日本学研究所客座学术研究员）的报告为“战争期间石桥湛山的日本认识”，主要介绍了石桥湛山描画的“日本未来图景”。湛山先生旗帜鲜明地主张日本应坚持小国主义路线，避免争做东洋盟主。同时提示出与当时“神国观”完全相反的、基于合理主义的“企业式”国家概念。

研究会最后，高桥寿美子（法政大学国际日本学研究所客座学术研究员）的“日本近代文学成立过程中的异文化兴亡——‘江戸’与‘非江戸’”报告详细解说了日本近代文学史中被遗漏的明治文学潮流，即“江戸风格文学”。高桥认为这一文学潮流与近代化推进过程中人们从地方城市向东京移动、集中有直接关系。我们或有必要从这个新观点出发重新审视文学史。

【执笔者：田中 優子（法政大学社会学部教授）】

스즈무라 유스케(鈴村裕輔·호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원) 씨의 ‘대평양전쟁 중, 이시바시 탄잔(石橋湛山)의 일본의식’이라는 발표에서 이시바시 탄잔의 ‘일본 본연의 자세’에 대한 주장을 소개했다. 탄잔은, 일본은 소(小)일본주의로 가야 하며 동양의 맹주(盟主)가 돼서는 안 된다고 주장했고, 당시의 신화적 국가관과는 정반대인 합리적 ‘기업체’로서의 국가관을 갖고 있었다.

다카하시 스미코(高橋寿美子·호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원) 씨의 ‘일본 근대문학 성립과정에서의 이(異)문화 흥망——‘에도(江戸)’대 ‘비에도(非江戸)’에서는 일본 근대문학사에서 누락된 메이지(明治)문학의 단면 즉, ‘에도풍 문학’에 대해 자세히 소개했다. 이러한 문학의 동향은 근대화에 의한 도쿄로의 인구 집중현상과 관계가 있어, 이 관점에서도 문학사를 재검토할 필요가 있다.

【기사집필：다나카 유코

(田中 優子, 호세이대학 사회학부 교수)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ①「〈日本意識〉の変遷—古代から近世へ」

第3回研究会

信仰から見た「日本意識」

報告者1：内原 英聡（日本学術振興会特別研究員、法政大学国際日本学研究所学術研究員）

報告者2：高山 秀嗣（二松学舎大学非常勤講師）

●日 時：2011年4月2日（土）13:30～17:00

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー25階
イノベーション・マネジメント研究センターセミナー室

●司 会：田中 優子（法政大学社会学部教授）

内原英聡 〈風水〉と〈祭祀〉にみる自治と連の変遷～八重山諸島を軸として～

「風水」と「祭祀」は近世琉球弧の村落社会を構築する上で、欠かすことのできない要素として意識されてきた。風水は人々が衣・食・住を獲得するためのフィールド（生活空間）を形成する技術として用いられ、祭祀は、その日々の営みを精神面から支える役割を担った。琉球弧の人々はこの二つの要素が円滑に作用したとき、はじめて豊穡の「世（ユウ）」がもたらされたと考えてきたのである。今回は1771年に宮古・八重山諸島で発生した「明和八年／乾隆三十六年の大津波」を取り上げ（※1）、この大災害を通じて、双方が八重山諸島の社会でいかに重視されてきたかを報告した。

本来、風水は科学的な「地理の法」として活用された。この思想と技術は紀元前の中国で生まれ、10世紀には東アジア全般に普及したと言われる。琉球国でも古地図の形跡から、14世紀以前には風水が導入されていたことが推測されている。

国策として風水を推奨した人物に、三司官の蔡温（1609～1879年）がいた。彼は留学生として渡唐した際に「地理（風水）」を学び、執政の職に就いた後も土木事業を中心にこの技術を適用した。八重山でも屋敷や墓の選定から村の区画、道路の舗装、灌漑用水の設置、樹木の植栽等に至るまで、生活空間のあらゆる場に風水が用いられた（※2）。

一方、祭祀には、その空間で営まれる暮らしの様々な要素が溶け込んでいた。祭りは生活を通じて得られる衣・食・住の「象徴」であり、死者と生者、あるいは「あの世」と「この世」をつなぐ「時」であり、あるいは、生命の循環を願う「場」として機能した。この報告では八重山の古祭にみられる「来訪神」信仰を事例に挙げた。来訪神とはニライ・カナイ（東方海上の彼方、地の底、洞穴の奥底等）より訪れる神々の総称である。この神々に対する信仰は東南アジア諸国から伝播した型もあり、近世の琉球国内では、度々、取り締まりの対象とされることもあった。1771年の大津波以前にも、この系統の祭りを規制する指令が王府から八重山に向けて布達されている（※3）。しかし、そうした時代の制約を受けつつも、各シマの家や御嶽（聖域）を中心とする祭祀活動が消滅することはなかった。

琉球弧のシマ社会に深く浸透した風水思想、および神々への信仰の基底には、人々を取り囲む「自然」への配慮と、畏敬の念が横たわっていた。この社会の人々は、その地理／自然を尊重することにより、はじめて自らが生かされることを認識していたのである。

※1『大波之時各村之形行書』（石垣市史叢書12）

※2『北木山風水記』（同16）

※3『与世山親方八重山島規模帳』（同2）・
『八重山島年来記』（同13）。

【記事執筆：内原 英聡（日本学術振興会特別研究員・
法政大学国際日本学研究所学術研究員）】

高山秀嗣 近代仏教者と「日本」—浄土真宗の視点から—

近代の仏教者は、「日本」をどのように認識し、また意識していたのか。「日本仏教の近代的再生」の姿を明らかにするために、近代に大きく展開した「海外布教」について検討した。今回は、近代仏教史の主導的な役割を果たした浄土真宗（特に東西本願寺教団）を対象とし、これらの教団に関係する仏教者を取り上げた。

海外布教は、近代仏教の再生に対しても多大な役割を果たす。この活動を考えるために、小栗栖香頂・曜日蒼龍・大谷光瑞に焦点を当てた。

香頂と中国、蒼龍とハワイ、光瑞とアジア。彼らは関わった国や地域で、おのおのの独自性を発揮している。彼らが活躍した時期もさまざまであり、それぞれの布教スタイルを「香頂：回帰型」・「蒼龍：移民型」・「光瑞：教化型」と仮に名づけた。さらに、明治10年代初頭の香頂の中国布教、明治20年代初めの蒼龍のハワイ布教、明治30年代以降に本格的に着手された光瑞のアジア布教の具体的内容についても言及した。

この海外布教の事例を通して、近代が仏教にとって再生の時代であることが明らかになった。仏教教団が近代化に成功したのは、教団所属の仏教者の鋭敏な感性と柔軟な姿勢にその理由がある。また彼らの行動を全面的に後援した教団首脳部の先見性にも、その遠因は存在した。

近代仏教の独自性を、近代化の進展の中に見出すことも可能である。仏教の独自性とは、海外進出の過程で、自らの立ち位置を見失わない布教に賭ける思いであった。ここで取り上げた仏教者たちは、純粹に真宗思想を海外に広めていったといえる。時代に限定された面もあったものの、海外布教によって仏教の近代化を成し遂げようとした思いは、彼らにも通底していたと考えられる。近代とは、仏教にとって現代にも連なっていく伝道再活性化の時期でもあったのである。

本テーマは、近代における「国家と宗教」の問題を、将来的に視野に入れることにもつながる。今回は仏教

の海外布教について扱い、それぞれの仏教者が独自の信念で、布教活動を成し遂げていったことを見てきた。さらに、海外布教が教団主導で行われつつも、同時に日本の近代化の動向と深く関わりながら進展したこと

についても検討を加えた。

【記事執筆：高山 秀嗣（二松学舎大学非常勤講師）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

3rd Research Meeting

‘Japan-consciousness’ within Belief

Presenter 1: UCHIHARA Hidetoshi (JSPS Scholar; Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Presenter 2: TAKAYAMA Hidetsugu (Adjunct Lecturer, Nishogakusha University)

Date: Saturday, 2 April 2011, 13:30-17:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Research Center for Innovation Management seminar room

Chair: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

Presentation 1: UCHIHARA Hidetoshi Changes in Autonomy and Community in Feng Shui and Ancestral Rituals: the Case of the Yaeyama Islands

Feng Shui was a kind of geography born in ancient China that disseminated widely through the early modern

Ryukyu Kingdom. It meant belief in and worship of nature as a god, and was a method of shaping living space. Rituals were created from the spiritual side of people's lives. Here I examined the importance of Feng Shui and its rituals upon Yaeyama Island society in the light of the great tsunami disaster that occurred there in 1771.

Report by: UCHIHARA Hidetoshi (JSPS Scholar; Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Presentation 2: TAKAYAMA Hidetsugu Modern-Age Buddhists and "Japan": From the Standpoint of the True Pure Land School

I described the “modern resurgence of Japanese Buddhism” from the angle of modern-age Buddhists. I examined the resurgence process of Buddhism through the modern-era overseas mission, focusing on Ogurusu Kocho, Kagahi Soryu, and Otani Kozui. Their activities have enabled Buddhism to modernize, and as a result Buddhism is deeply connected with trends in international society. In other words the modern age has seen a continuing revitalization of Buddhist tradition.

Report by: TAKAYAMA Hidetsugu (Adjunct Lecturer, Nishogakusha University)

战略研究基础形成支援项目研究方法①“‘对日认识’的变迁——从古代到现代”

第3次研究会

从信仰中看到的“对日认识”

报告者1：内原 英聡（日本学术振兴会特别研究员、国际日本学研究所学术研究员）

报告者2：高山 秀嗣（二松学舎大学非常勤講師）

时 间：2011年4月2日（星期六）13:30-17:00

会 场：法政大学市谷校区 布赏那德Tower25层 革新管理研究中心演習室

主 持 人：田中 优子（法政大学社会学部教授）

报告1：内原英聡

“风水”、“祭祀”中自治和联合的变迁——以八重山群岛为中心

“风水”作为地理学诞生于中国古代，于近代在琉球王国中普及。而与此同时，将自然作为神灵崇拜的信仰和祭祀也在该文化圈中占有重要位置。风水还被作为营造

生活空间的技术加以利用。祭祀则支撑着人们生活中的精神世界。此次报告中，作者引用1771年八重山群岛发生的大规模海啸为事例，将该地区社会如何并重风水和祭祀的历史重新还原。

【执笔者：内原 英聡

（日本学术振兴会特别研究员・国际日本学研究所学术研究员）】

报告2：高山秀嗣

近代佛教徒与“日本”——从净土真宗的视点观察

尝试从近代佛教徒的观点论证“日本佛教的近代化”过程。以近代大举展开的海外布教为突破口，聚焦小栗栖香顶、曜日苍龙、大谷光瑞3人的生平事迹、讨论日本佛教的重整过程。通过他们的活动，佛教实现近代化的同时也增进了与国际潮流的交流。因此，对于佛教而言近代是连接当代、普及更趋活跃的时期。

【执笔者：高山 秀嗣（二松学舎大学非常勤講師）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 《국제일본학 연구방법에 기초한 〈일본의식〉 재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래》

연구① 〈일본의식〉의 변천-고대에서 근세로

제 3 회 연구회

신앙으로 본 〈일본의식〉

일보고자1: 우치하라 히데토시(内原英聡·일본학술진흥회 특별연구원·국제일본학연구소 학술연구원)

보고자 2: 다카야마 히데쓰구(高山秀嗣·니쇼가쿠사(二松学舎)대학 비상근 강사)

일 시: 2011년 4월 2일(토) 13시 30분~17시

장 소: 호세이대학 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 이노마네 연구센터 세미나실

사 회: 다나카 유코(田中優子·호세이대학 사회학부 교수)

보고 1: 우치하라 히데토시(内原英聡)

‘풍수’와 ‘제사’에서 본 자치와 련(連)의 변천—야에야마쇼토(八重山諸島)를 중심으로

풍수는 지리학으로서 고대 중국에서 시작돼, 근세 류큐(琉球)왕국에도 널리 보급됐다. 한편, 자연을 신으로 숭배하는 신앙과 제사도 이 문화권에서 중요시된 항목이었다. 풍수는 생활공간을 만드는 기술로써 활용됐고 제사는 정신적인 면으로 사람들의 생활을 지지해 왔다. 이번 보고에서는 1771년에 야에야마쇼토에서 발생한 대규모 쓰나미를 예로 들어 이 대규모 재해를 통해 풍수와 제사가 야에야마쇼토 사회에 얼마나 중시되었는가를 보고했다.

【기사집필: 우치하라 히데토시

(内原英聡, 일본학술진흥회 특별연구원·국제일본학연구소 학술연구원)】

보고 2: 다카야마 히데쓰구(高山秀嗣)

근대 불교와 ‘일본’—정토진종(浄土真宗)의 시점에서

근대 불교인이라는 관점에서 ‘일본 불교의 근대적 재생’의 모습을 밝혀가는 시도를 했다. 불교의 재생과정에 대해서는, 근대에 대대적으로 해외 포교를 전개한 오구루 스코쥬(小栗栖香頂), 가가히 소료(曜日蒼龍), 오타니 고즈이(大谷光瑞) 등 3명에게 초점을 맞춰 검토했다. 그들의 활동으로 일본 불교는 근대화와 함께 국제사회의 흐름에 깊이 관여하게 된다. 즉, 근대란 불교에 있어서 현대와 연결하는 전도의 재활성화 시기이기도 했다.

【기사집필: 다카야마 히데쓰구

(高山秀嗣, 니쇼가쿠사(二松学舎)대학 강사)】



田中 優子 教授



会場の様子

第4回研究会

●日 時：2011年5月21日(土) 13:30～15:00

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室

去る5月21日(土)、法政大学国際日本学研究所セミナー室において、法政大学国際日本学研究所戦略的研究基盤形成支援事業「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」アプローチ①「〈日本意識〉の変遷」(以下、「アプローチ①」)の第4回研究会が開催された。今回は、科学技術研究補助金「近世日本の大衆文化における「日本」意識の表現—17・18世紀を中心に—」(研究課題番号：22320071)の研究会との併催であった。

研究会では、まず2011年度の活動方針として、アプローチ①の研究体制が確認された。今年度の研究には、田中優子を統括とし、小口雅史(古代)、坂本勝(古代)、小秋元段(中世)、竹内晶子(中世)、小林ふみ子(近世)、横山泰子(近世)、川村湊(近現代)、吉田真樹(日本思想史)、根津朝彦(現代ジャーナリズム史)、鈴木裕輔(近代思想史)が参画し、研究補助として彭丹、高橋寿美子、内原英聡及び法政大学大学院国際日本学インスティテュート博士後期課程に在籍する国際日本学研究所学術研究員が参加することとなった。

次に、2010年度の研究活動の実績が報告された。2010年度は研究会が2回、シンポジウムが1回、特別講演会が1回、映画上映会が1回行われたほか、フルテキストデータベースを活用することで、大学院博士後期課程の学生が特定の言葉を各自の専門領域で検索するようになり、すでに複数の研究論文が成果としてまとめられている。

2011年の具体的な研究活動としては、「国難と日本意識」という新たな研究の課題が提起された。そして、2011年3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震とその後の津波や余震などにより甚大な被害をもたらした東日本大震災後に日本列島に住む人々の間に起きた「震災を国難として捉える」という態度が、「日本意識」の研究対象のひとつとして適切であるとともに、日常生活で起きている事柄に絶えず注目し、社会と積極的に関わり、社会に研究成果を還元することが、とりわけ「日本意識研究」には重要であることが確認された。その際、「国難の研究」ではなく、比較研究の対象として「国難」を扱うこと、「戦争によってもたらされる国難」と「災害によってもたらされる国難」の区別、「為政者レベルでの国難への対応」だけでなく「民衆レベルでの国難への対応」、「日本では中世までは民衆が持つ情報の絶対量が少ないこと」、「誰にとっての国難か」という点を踏まえることで意見が一致した。想定される研究の項目として挙げられたのは、「蒙古襲来と朝鮮出兵の対比」、「天明の浅間山噴火に関する当時の随筆の内容の比較検討」、「安政の大地震に対する「被

災地域外に住む人々」の反応」、「関東大震災と東日本大震災の対比」などであった。

これに続き、2011年度の具体的な研究会の開催予定が検討された。2011年度の研究会の日程は以下のとおりである。

- ・第3回研究会(4月2日(土))、報告者：内原英聡(法政大学)、高山秀嗣(二松学舎大学)…終了
- ・第4回研究会(5月21日(土))、全体討議…終了
- ・第5回研究会(6月25日(土))、報告者：大屋多詠子(青山学院大学)
- ・第2回シンポジウム「日本意識と対外意識」(7月16日(土)、17日(日))、基調講演：ロナルド・トビ(イリノイ大学)、報告者：石上阿希(立命館大学)、岩崎均史(たばこと塩の博物館)、川村湊(法政大学)、タイモン・スクリーチ(ロンドン大学)、大木康(東京大学)
- ・第6回研究会(9月開催予定)、報告者：木村純二(弘前大学)
- ・第7回研究会(10月15日(土))、報告者：マートライ・ティタニラ(早稲田大学)
- ・第8回研究会(11月開催予定)、報告者：未定
- ・第9回研究会(12月開催予定)、報告者：未定
- ・第3回シンポジウム「国難と日本意識」(2012年1月21日(土)、22日(日)開催予定)、報告者：未定
- ・第10回研究会(2012年2月開催予定)、報告者：未定
- ・第11回研究会(2012年3月開催予定)、報告者：未定

なお、今年度も、昨年度に引き続き、大学院博士後期課程在籍者による研究発表を奨励するとともに、必要に応じて大学院修士課程在籍者にも発表の機会を提供することが確認された。

最後に、今年9月に行われる大連民族学院との共催による「大連シンポ」及び11月に行われる「アルザスシンポ」の参加者が検討された。その結果、「大連シンポ」には小口雅史、小林ふみ子の両氏が、「アルザスシンポ」には鈴木裕輔、内原英聡の両氏が参加することが決まった。

以上の内容を踏まえ、2011年アプローチ①の具体的な活動が本格的に始まることとなった。

(以上、敬称略)。

【記事執筆：鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

Report on 4th Research Meeting

Date: Saturday, 21 May 2011, 13:30-15:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies seminar room

Chair: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

The 4th research meeting of the project “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future” Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras” (below

“Approach 1”) was held on Saturday, 21 May.

The research meeting discussed activity strategies for 2011, reported on the results of research from 2010, and laid plans for the actual research activities and research meetings during 2011. The new research project for this year was proposed as “National crisis and Japan-consciousness”. This does not mean “research of national crisis”, but refers to treating “national crisis” as a focus for comparative research. It was also decided to hold 9 research meetings and 2 symposiums this year. As last year, PhD students are encouraged to present their research, and the opportunity will be offered for such presentations.

The above discussion marked the start of the activities of Approach 1 for the year 2011.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目“用国际日本学的方法再讨论——对日认识的过去、现在和未来”

研究方法①“‘对日认识’的变迁——从古代到现代”

第4次研究会报告

时 间：2011年5月21日（星期六）13:30-15:00

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所演習室

主持人：田中 优子（法政大学社会学部教授）

法政大学国际日本学研究所实施、文部科学省私立大学战略研究基础形成支援项目“用国际日本学的方法重新讨论——对日认识的过去、现在和未来”研究方法①“‘对日认识’的变迁”（以下简称“方法①”）的第4回研究会于5月21日（星期六）召开。

本次研究会报告了2010年度研究成果的同时，对2011年度的研究方针、举办研究会的具体日程等展开了讨论。会议中“国难与对日认识”作为本年度的新课题被提出，与会成员一致认为该课题不应停留在“国难研究”，而应该将“国难”作为比较研究的对象加以认识。此外，本年度的9次研究会中将有2次以研讨会的形式举办。与去年同样，鼓励大学院在籍博士生积极报告其研究成果，根据需要还可为在读研究生提供发表机会。

根据以上内容，2011年度方法①的具体研究活动正式实施。

【执笔者：铃村 裕辅

（法政大学国际日本学研究所客座学术研究员）】

전략적 연구기반 형성 지원사업《국제일본학 연구방법에 기초한〈일본의식〉재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래》

연구①「〈일본의식〉의 변천-고대에서 근세로」

제4회 연구회 개최 보고

일 시：2011년 5월 21일(토) 13:30 ~ 15:00

장 소：호세이대학 이치가야캠퍼스 국제일본학연구소 세미나실

사 회：다나카 유코(田中 優子·호세이대학 사회학부 교수)

지난 5월 21일(토), 호세이대학 국제일본학연구소전략적 연구기반 형성 지원사업《국제일본학 연구방법에 기초한〈일본의식〉재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래》연구①「〈일본의식〉의 변천」(이하 연구①) 제4

회 연구회가 개최되었다.

연구회에선 2010년도의 연구활동 실적 보고, 2011년도 활동 방침, 2011년 구체적인 연구회 개최예정에 대해 검토하였다. 금년도의 새로운 연구과제로 ‘국난과 일본의식’이 제기되었는데, 본 연구에서는 ‘국난 연구’가 아닌, 비교 연구 대상으로 ‘국난’을 다룰 것을 확실히 했다. 또한 금년도는 9번의 연구회, 2번의 심포지움 개최하기로 하고, 작년도에 이어 대학원 박사후기과정 재적자의 연구발표 장려과 동시에 필요에 따라 대학원 석사과정 재적자에게도 발표기회를 제공하기로 하는 등, 2011년 연구①의 구체적인 활동이 본격적으로 시작됐다.

【보고자：스즈무라 유스케

（鈴村 裕輔, 호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원）】



田中 優子 教授



会場の様子

第5回研究会

曲亭馬琴の日本意識

- 報告者：大屋 多詠子（青山学院大学文学部准教授）
- 日 時：2011年6月25日（土）15：30～17：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：小林 ふみ子（法政大学文学部准教授）

本発表では、曲亭馬琴の日本意識について「やまとだまし」という言葉に着目した。

本来の「やまとだまし」が生来の世に用いられるために必要な、当意馬琴は「日本魂」という言葉を、一貫して、覚悟をもって事を行おうとする場面において忠孝、あるいは潔く揺るぐことのない心持ちを指して使っている。

事に迫りて死を軽んずるは、日本（やまと）だましひなれど多は慮の浅きに似て、学ざるの悞なり。

（『椿説弓張月』二五回）

「日本魂」は延いては、死に急ぎがちな心をも指すが、命を軽んずることについては、馬琴は否定的である。『南総里見八犬伝』九三回では、主君のために河鯉孝嗣が死を覚悟して、犬士らに戦いを挑むが、犬坂毛野に諫められる。

河鯉孝嗣は…詞雄々しく死を急ぐ、忠と孝とに敷嶋の、日本（やまと）魂潔き、那（かの）親にしてこの子あり。…（以下第九四回）…和殿この理をよく悟らば、這里（ここ）にて戦歿（うちじ）すべからず、存命（ながらへ）て主君に仕へ、諫めて主君の惑ひを覚さば、忠孝両（ふたつ）ながら、全かるべし

このように、馬琴は、むしろ生き延びて忠孝を果たすことを評価している。即妙の機知の働きや、常識的な思慮分別、善悪の是非を弁別できるといったことを指し、後天的に習得する学問である才・漢才と対比して用いられることが多いことについては先学の研究が備わる。これに対して、忠孝を指す馬琴の「日本魂」は、むしろ幕末の尊王攘夷的な色合いが強いように見える。では馬琴の「日本魂」は何に影響を受けたものであろうか。国学者である本居宣長や水戸学からの影響が見られることについては従来指摘されているが、「日本魂」に関しては「やまと魂」を日本民族固有の気概あるいは精神と捉える宣長とは異なり、水戸学とは類似するが、水戸学より馬琴がやや先行する。「日本魂」を忠孝と捉える点は、垂加神道で尊王を説いた唐崎士愛（寛政八年没）と近い。士愛の影響を明確に見出すことは難しいが、「心の鞆（たづな）寛（ゆる）さざる、日本（やまと）魂、唐崎の、関路を投て」（『南総里見八犬伝』一四七回）と「日本魂」から「唐崎」を縁語のように引き出している例もあり、馬琴が士愛から間接的に影響を受けた可能性も考えられる。

士愛の例のように「やまとだまし」という言葉は尊王思想と関わりが深い。また馬琴も古くから水戸学の影響下に尊王・勤王思想を抱いていたとしばしば論じられる。馬琴が易姓革命を否定し、王室を万世一系と捉える点は水戸学にも通じるが、馬琴は必ずしも水戸学のように南朝正統論を支持するわけではなく、南

北正閏には拘泥せず、むしろ武門に対する王室の正統性を述べている。王室を尊ぶ一方で、和漢兼学を目指し、かつ新井白石の影響下に客観的に歴史を批評しようとする立場を貫き、天皇批判をも行っていることが確認できる。馬琴の「尊王思想」とは、現実の水戸学や尊王運動と直接交わるものではない次元のものであったのであり、それは馬琴の「日本魂」という語の使用例からも再確認できる。馬琴の「日本魂」は忠孝をも指すが、必ずしもそれは天皇に対するものではない。馬琴の「尊王思想」は、むしろ歴史を俯瞰した上で歴史批評という立場からの「尊王思想」と言うべきものであったのであろう。

当日の議論では、「やまと」の魂を、儒教道德である忠孝と捉えたことについて質問があったが、馬琴は天照大神を祭る神道は王室にとっては祖先を祭る行為であり、民が自分の祖先を祭る行為と同じであり、それは忠孝に繋がると捉えていたと考えられる。また、いつ頃から「日本魂」に忠孝の意味付けがされるようになったのかという点については、士愛以前の垂加神道の影響等についても考察する必要があり、今後の課題である。

【記事執筆：大屋 多詠子（青山学院大学文学部准教授）】



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project
Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’:
from Ancient to Early Modern Eras”

5th Research Meeting

Kyokutei Bakin and Japan-consciousness

Presenter: OYA Taeko (Associate Professor, Faculty of Letters, Aoyama Gakuin University)
Date: Saturday, 25 April 2011, 15:30-17:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies seminar room
Chair: KOBAYASHI Fumiko (Associate Professor, Faculty of Letters, Hosei University)

In this presentation I discussed “Kyokutei Bakin and Japan-consciousness” in terms of “Nihon damashii (Japanese spirit)”. Bakin’s “Yamato damashii” is used to describe the filial piety or unwavering grace found in scenes of determined action. This can lead to premature death, though Bakin is opposed to low regard of life. “Yamato damashii” is a term closely related to the Bakumatsu-period ideology of emperor worship, and

Bakin is often described as embracing emperor worship and pro-imperialism as taught by the Mito School. Bakin was indeed opposed to the concept of change of dynasty, and believed in one line to the throne in agreement with the Mito School. However, Bakin was not preoccupied with the Northern-Southern Dynasty debate, referring to the true imperial lineage in contrast to military families. And whilst he treats the imperial family with respect, we can detect some cases of objective criticism of the emperor. Bakin’s “emperor worship ideology” was far from the realities of the Mito School and the emperor worship movement; this is clarified by his use of “Yamato damashii”. Bakin’s “emperor worship ideology” emanates from historical criticism based on a comprehensive view of history. Also, Bakin’s “Yamato damashii” has its connotations of filial piety in common with the ideology of Karasaki Kotochika, yet it is difficult to find any clear relationship between them. My next research theme will be the origin of the connection between “Yamato damashii” and filial piety, and the influence upon Bakin.

Report by: OYA Taeko (Associate Professor, Faculty of Letters, Aoyama Gakuin University)

战略研究基础形成支援项目“用国际日本学的方法再讨论——对日认识的过去、现在和未来”

研究方法①“‘对日认识’的变迁——从古代到现代”

第5次研究会

曲亭马琴的对日认识

报告者：大屋 多咏子（青山学院大学文学部副教授）
时 间：2011年6月25日（星期六） 15:30-17:30
会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学演
习室
主持人：小林文子（法政大学文学部副教授）

法本次报告围绕“曲亭马琴的日本意识”展开，将着眼点放在“日本魂”这一名词上。马琴提出的“日本魂”其含义是怀有“忠孝”之心行事，或指高洁、坚定的信念。而其外延也包括随时准备赴死的精神，但马琴本人对轻

生却持批判态度。“日本魂”与日本幕末时代尊王思想有着紧密联系。马琴常被认为深受水戸学影响、持有尊王・勤王思想。但事实上马琴反对易姓革命，虽然与水戸学同样将王室看作“万世一系”但并不拘泥于南北正闰、对武门阐述王室的正统性，尊王的同时也对天皇进行客观的批判。因此，马琴的“尊王思想”是与现实意义上的水戸学以及尊王运动没有直接联系的理论体系。这一见解从他“日本魂”的实际使用中也能得到印证。马琴的“尊王思想”是在俯视历史之上展开的一种历史批判。另外，马琴的“日本魂”涉及到“忠孝”，这与唐崎士爱的思想有共通之处，但论证他们之间明确的相互影响却非常困难，这是此项研究今后的重要课题。

【执笔者：大屋 多咏子（青山学院大学文学部副教授）】

전략적 연구기반 형성 지원사업《국제일본학 연구방법에 기초한〈일본의식〉재검토—〈일본의식〉의 과거·현재·미래》

연구①〈일본의식〉의 변천—고대에서 근세로

제 5 회 연구회

교쿠테 바킨(曲亭馬琴)의 일본의식

보고자: 오오야 다에코(大屋 多詠子·아오야마가쿠인(青山学院)대학 문학부 부교수)
일 시: 2011년 6월 25일(토) 15:30 ~ 17:30
장 소: 호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
사 회: 고바야시 후미코(小林ふみ子·호세이대학 문학부 부교수)

본 발표에서는 ‘교쿠테 바킨(曲亭馬琴)의 일본의식’을 ‘일본정신’이라는 말에 착목해 발표했다. 바킨의 ‘일본정신’은 각오하고 어떤 일을 할 때, 충효 또는 정결하고 굳건한 마음가짐을 말한다. 더 나아가서는 죽음을 서두르려 하는 마음가짐을 의미하지만, 바킨은 생명을 경시하는 것에 대해서는 부정적이다. ‘일본정신’은 바쿠후 말기(幕末)의 존왕(尊王)사상과 관련 깊은 단어

로, 바킨도 미토(水戸)학의 영향을 받은 존왕·근왕(勤王) 사상의 소유자였다고 자주 거론되고 있다. 그러나 바킨이 역성(易姓)혁명을 부정하고 왕실을 만세일계(万世一系)로 파악한 점은 미토학과도 상통하지만, 바킨은 남북정운(南北正閏)에 구애받지 않고 오히려 무가(武門)에 대한 왕실의 정통성을 주장하고 있다. 또한, 왕실을 존중하는 한편, 객관적으로 왕실을 비판했다는 사실도 확인할 수 있다.

바킨의 ‘존왕사상’은 미토학과 존왕운동과 직접적으로 관계하지 않는 다른 차원의 문제로, 이것은 바킨의 ‘일본정신’이란 말을 사용한 예에서도 재확인할 수 있다. 바킨의 ‘존왕사상’은 오히려 역사를 부감한 위에 역사비평이라는 입장에서 나온 사상이라 생각된다. 즉, 바킨의 ‘일본정신’이 충효를 가리킨다는 점은 가라사키고토치카(唐崎士愛)의 사상과 상통하지만, 명확한 영향관계를 찾아내기는 어렵다. ‘일본정신’과 충효 관계의 근원, 바킨에의 영향에 대해서는 향후 과제로 한다.

【기사집필: 오오야 다에코

(大屋 多詠子, 아오야마가쿠인(青山学院)대학 문학부 부교수)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2010 年度第 10 回東アジア文化研究会

「和同開珎」の文字から見た中日の文化交流史

●報告者：王 維坤（専修大学客員教授、西北大学文化遺産学院教授、西北大学日本文化研究センター主任）

●日 時：2011 年 1 月 13 日（木）18：30～20：30

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

●司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

私は法政大学国際日本学研究所教授王敏先生のお陰を持ち、2011 年 1 月 13 日に「和同開珎の「同」「珎」と「圀」の文字から見た中日の文化交流史」というタイトルで、講演した。この拙文は、じつはこの講演稿に基づいて、加筆したものである。

さて、古代の日本人は、現代の日本人と同じように、非常に賢明だと言える。中国の漢字を含む外来文化を受け入れた時、そのまま受け入れたのではなく、ある程度選択して自文化に適合したものだけを模倣したのである。これこそ日本の文化的特質とも言える。その例として、「和同開珎」は元々「和銅開寶」と書くべきなのであるが、この貨幣を鑄造しやすくするために、それぞれ「銅」と「寶」を「同」と「珎」として省略と私は考えている。この点から言うと、「ワドウカイチン」よりもむしろ「ワドウカイホウ」と読んだ方が正しいと思う。

日本の常用漢字は、私の初歩的研究によると、大体三つの類型に分けられる。

一、「同字同義」という漢字

常用漢字の中でいわゆる「同字同義」という漢字は、日中で同じ漢字、同じ意味を指す。たぶん 85 パーセント以上を占めるかも知れない。次に時間があれば、私は詳しく計算したいと思う。しかし、僅かにいくつかの漢字は同じであるけれども、意味は全然違う。例えば、「娘」は日本では「女の子」を指すのであるが、中国では自分の「母親」を指す。その意味は反対である。なお、日本の「手紙」は、中国の「トイレットペーパー、つまり衛生用紙」に相当する、という部分の文字が含まれている。

二、日本人に造られた「固有漢字」

これは日本人の知恵によって、自ら造った「日本の文字」で、「固有漢字」とも言う。数がそんなに多くはないが、意味が深い。例えば、「辻」とは、中国語で表示すれば「十字路口」（十字路の交差点）という言葉になる。この点から分析すると、日本のほうが良い、中国の方が結構、複雑である。また、「峠」という言葉は、山の頂上にある道路を表したと言えるけれども、中国では、この漢字を見たことがない。更に言うと、日本の「畑」（はたけ）は中国にはない。つまり、日本の「水田」の反対語は「畑」である。中国では「旱田」と言うが、字はまったく違う。日本は島国なのでおそらく魚偏に関する常用漢字がいちばん多いであろう。

三、意図的に変えた常用漢字

しかし、中国の漢字には、少しでも変えれば、日本

の漢字になりうるものがある。一部の漢字は、ざっと見ると、中国の漢字と同じようであるが、実際、少し異なるところもある。

例えば、中国の器物の「器」と日本の器物の「器」、中国の調査の「査」と日本の調査の「査」、中国の「恵」と日本の「恵」、中国の「徳」と日本の「徳」はすべて異なっている。中国の文字は「会意」という構造原理で、「江」「海」「湖」「泊」はいずれも「氵」で、水の多い量を表すのである。水の少ない量を表示すると、いずれも「ㇿ」になる。例えば、「沖」「涼」「冰」は日本の漢字と比べると、「沖繩」の「沖」、「涼子」の「涼」、「氷」の水の「氷」と異なるであろう。特に中国「臭」と日本の「臭」を比べれば、異なる所もすぐ見つかる。中国の「臭」字は「𠂔」がある。これがあるかどうかで、意味が随分異なると思う。中国の「臭」という文字の構造原理は、二つの部分からなるのである。上の部分の「自」は、実際「鼻」の象形文字で、下の部分の「犬」は、「犬」の象形文字である。この文字の構造をとったのは何故かと言うと、犬の嗅覚のすぐれたことを表わしたからである。であるから、中国の「臭」という字は、かならず「𠂔」がある。もしこの「𠂔」がなければ、「犬」ではなくなり、文字にならないと言える。これが漢字の象形文字の面白さであろう。だからこそ、中国では、日本のような「臭」字はない。

さて、このような観点から、「和同開珎」の「珎」（ちん）について考えてみると、日本の「和同開珎」の「珎」は、中国の「珍（ちん）」字の異体字ではなく、貨幣の「寶（ほう）」字の真中の部分の「珎」だけを採り、意図的に造った日本の漢字だと思う。であるから、この文字は実質的に、「寶」の上の「宀」冠、下の「貝」の部分を省略して、真中の「珎」だけを残して模倣したからだと思う。この文字は間違いではないが、やはり「貝」の部分を省略しすぎたと思う。何故かと言うと、貨幣としては、下の「貝」の部分が省略できないからである。例えば、貨幣の「貨」、通貨の「貨」、財布の「財」、遺産の「遺」などのお金に関する文字は、いずれも「貝」という部分が付いている。中国のお金は、「貝」から始まったわけである。であるから、「貝」はお金の代名詞である。このことは賄賂の「賄」からはっきりと見ることができる。この字は「貝」と「有る」という構造であろう。つまり、「貝」が「有る」という意味である。貝があれば、賄賂ができる。であるから、貝がなければ、「賄賂」はできなくなってしまう。いま日本人は、よく「袖の下」と言う。この言葉はもともとのお金の意味を一切含んでいないと思う。「珎」（ちん）という読みと、「珍しい」、「あまりみかけない」という意味で、お金としての意味は、付帯していないと言える。だからこそ、「珎」

(ちん) よりむしろ「ほう」と読んでいたのが正しいと、私はずっと考えている。換言すれば、日本の708年に鑄造した「和同開珎」の読み方の「わどうかいちん」を「わどうかいほう」と直すべきだと思う。

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

10th East Asian Culture Research Meeting of 2010 History of China-Japan Exchange seen in the Characters on “Wadokaichin”

Presenter: WANG Weikun (Visiting Professor, Senshu University; Professor, School of Cultural Heritage and Head, Research Center for Japanese Culture, Northwest University)

Date: Thursday, 13 January 2011, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies seminar room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The Japanese of ancient times were wise like their

战略研究基础形成支援项目“用国际日本学的方法再讨论——对日认识的过去、现在和未来”

研究方法③“‘对日认识’的现状——东亚地区为中心”

2010年度 第十次东亚文化研究会

从“和同開珎”文字来看中日文化交流史

报告者：王 维坤（专修大学客座教授 西北大学文化遗产学院教授 西北大学日本文化研究中心主任）

时 间：2011年1月13日（星期四）18:30-20:30

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层、国际日本学研究所演習室

主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

古代日本人与现代日本人同样，可以说是非常贤明的。他们在学习和接受包括中国汉字在内的外来文化时，并不是原封不动地去接受。从某种程度上来说，总是选择那些适应本民族文化的事物加以模仿，这正是日本文

【記事執筆：王 維坤（専修大学客員教授、西北大学文化遺産学院教授・西北大学日本文化研究センター主任）】

present-day counterparts. When confronted by foreign culture, which included Chinese characters, they did not adopt everything in its entirety; they were selective, and imitated only that which suited their own culture. This can be described as Japan's cultural uniqueness. An example of this, “Wadokaichin”, should have been written “Wadokaiho”, and it was in order to make the minting of this coin easier that I believe the characters for “copper” and “value” were abbreviated. Thus it would be more correct to read it as “Wadokaiho” than “Wadokaichin”.

Seen from this perspective, the “chin” of the Japanese “Wadokaichin” is not a variant of the Chinese character “chin” meaning “rare”, but suggests that the Japanese have taken a part of the Chinese character “ho”, “value”, intentionally creating their own character. I believe this character is essentially the result of stripping the character “ho” of its upper and lower parts, leaving the central part that happens to resemble the character “chin”.

Report by: WANG Weikun (Visiting Professor, Senshu University; Professor, School of Cultural Heritage and Head, Research Center for Japanese Culture, Northwest University)

化的特征所在。比如说，我认为“和同開珎”原本应该写成“和銅開寶”，但是为了便于铸造货币起见，分别将“銅”字与“寶”字简化为“同”字与“珎”字。因此，我觉得与其说把它读作“hetongkaizhen”倒不如读作“hetongkaibao”为好。

由此我们再来考虑一下“和同開珎”的“珎”（zhen）字读音，我始终坚持认为日本“和同開珎”的“珎”（bao）字，并不是“珍”（zhen）字的异写体，而是有意识地只采纳了货币“寶”（bao）字中间的一部分所造的日本汉字“珎”字。毋容讳言，此字实质上就是在省略“寶”字上部的“宀”冠和下部的“貝”之后，加以模仿中间部分的“珎”（bao）字而已。进而言之，我认为“珎”（bao）字并不是错别字，而只是觉得省略下部的“貝”字有点过了，因为中国的货币是从“貝”开始的。

【执笔者：王 维坤（专修大学客座教授・西北大学文化遗产学院教授・西北大学日本文化研究中心主任）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 《국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식> 재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래》 연구③ <일본의식〉의 현재-동아시아를 기점으로

2010년도 제10회 동아시아 문화 연구회

한자 ‘和同開珎(와도카이친)’으로 본 중·일 문화교류사

보고자: 왕 웨이쿤(王 維坤·센슈(専修)대학 객원교수·시베이(西北)대학 문화유산학원 교수·시베이(西北)대학 일본문화 연구센터 주임)

일 시: 2011년 1월 13일(목) 18:30 ~ 20:30

장 소: 호세이대학 이치가야캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민(王 敏·호세이대학국제일본학연구소 교수)

고대 일본인은 현대 일본인과 같이 매우 현명하다고 할 수 있다. 일본은 중국 한자를 포함해 외래문화 도입 시, 무작정 도입하는 것이 아니라, 자국 문화와 융화될 만

한 것을 취사선택해 모방했다. 이것이야말로 일본 문화의 특징이라 할 수 있다. 예를 들면 ‘와도카이친(和同開珎·일본에서 가장 오래된 화폐)’은 원래 ‘와도카이호(和銅開寶)’로 써야 하는데 화폐 주조를 쉽게 하기 위해 ‘銅’과 ‘寶’를 ‘同’과 ‘珎’으로 생략한 것으로 보인다. 그러므로 ‘와도카이친’이 아니라 ‘와도카이호’로 읽는 것이 옳다.

이러한 관점에서 ‘와도카이친(和同開珎)’의 ‘珎’을 보면, 일본의 ‘和同開珎’의 ‘珎’은 중국 한자 ‘珍’에서 온 것이 아닌, 화폐를 의미하는 ‘寶’의 획수 안에서 ‘珎’만을 채택하여 의도적으로 만든 일본식 한자로 보여진다. 즉 이 문자는 실질적으로 ‘寶’에서 ‘宀’와 ‘貝’를 생략하고 중간에 ‘珎’만을 남겨서 모방했다고 생각된다.

【기사집필: 왕 웨이쿤
(王 維坤, 센슈(専修)대학 객원교수·시베이(西北)대학 문화유산학원 교수·시베이(西北)대학 일본문화 연구센터 주임)】

2011 年度第 1 回東アジア文化研究会

中国における日本文学史研究の新展開

—王健宜氏『日本近現代文学史』をテキストに—

●報告者：楊 偉（法政大学国際日本学研究所外国人客員研究員、四川外国語学院日本学研究所所長）

●日 時：2011 年 4 月 27 日（水）18:00～20:00

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 26 階 C 会議室

●司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

「日本現代化歷程研究叢書」の一冊として中国で出版された最新版の王健宜氏著『日本近現代文学史』（世界知識出版社、2010 年 3 月）をテキストに、従来の日本文学史論著と比較しながら、そこに如何なる特色と新しい視点があるかを検証する。さらにこのテキストを切り口に中国における日本文学研究の進展と動きを考察し、中日間の相互認識に与えられる影響を探るのが本報告の目的である。

経済、政治、社会、文化思想、対外関係という五つの分野から日本現代化の実践と特色を明らかにし、個別から全体へと日本現代化の規則と特色を把握するのが「日本現代化歷程研究叢書」の狙いであるという（本書「総序 日本現代化研究の視点と課題」）。この叢書の一冊としての『日本近現代文学史』は、日本人の美意識、文学観の変容を反映させる日本文学を通じて、日本現代化の歷程の一側面を浮き彫りにするのがその役割と考えられる。本書は十章から構成され、トータルな歴史把握と総合的な観点に詳しい作家論と作品論を加えるという形で明治初期から平成までの日本近現代文学を考察している。本書の特色は単なる文学研究の枠を乗り越えて、文学を時代の大きな背景に置いて、史実と結び付けて文学の時代性を強調することにある。そのために各章のはじめに時代の社会状況と社会思潮を詳しく紹介し、文学の発展の流れを描きだすのに力点が置かれている。文学の伝承関係をはっきりさせるべく江戸文学に少なからぬ紙面を割くと同時に、これまでの日本文学史ではあまり触れなかった平成文学も第十章として詳しくとらえることによって、近現代文学形成の源に遡り、これからの傾向を展望している。イデオロギーに影響されやすい従来の文学史と違って、本書の作家論と作品論は政治性、倫理性よりも文学性、学術性を重んじ、客観的になろうとする努力が見られる。たとえば、軍国主義と何らかの関係があると思われる一時中国で作品が出版禁止となった三島由紀夫を、戦後の文化が次第に風化した背景に、社会の風潮と現実とに反逆し、時代の発展に背を向けた極端な「精神主義者」という評価、石原慎太郎の『太陽の季節』を、伝統的な倫理道徳へ挑戦し、「性」においてわがままに振舞う戦後若者の実態を描いて、新しい時代の若者のライフスタイルを模索した作品という評価に、比較的中立的な見方が示されている。

従来の日本文学史と比べると、本書には中国人の視

点を感じられるところが少なくない。戦後、新日本文学会と「近代文学」派による「政治と文学」の論争、「党生活者」をめぐる議論を、紙面を惜しまずに客観的に分析し、政治に対する文学の自律を唱える部分は、文化大革命を経験させられ、政治主導からの脱出を図る中国人学者の実感と反省を仄めかしている。そして本書における川端康成への高い関心は、川端文学を西洋文学の手法と日本固有の美意識を完璧に融合させたモデルとして、中国文学にも方法論的な示唆を与えようものと見做し、出版ブームと研究ブームを起こしている中国学界の動きと関連している。そして、日本で中間小説として純文学と一線を画された山崎豊子、井上靖、水上勉、松本清張などの社会派文学を高く評価したのも中国人の視点によるもので、文学の諸概念をめぐる中日間の差異がうかがわれる。これらの差異の発見は日本における日本文学研究の新視点をもたらす切っ掛けになり、中国における日本文学翻訳と研究に新しい構想の形成につながることを期待される。

2010 年まで、中国で出版された日本文学史は 30 余種類あると言われているが、その中の 20 余種類は 2000 年以降のものであることから、近年、一種の日本文学史研究ブームが起きていると思える。この 20 種類の日本文学史を見ると、日本語学科の学生を対象とする教科書的なものが半分以上を占めて、単なる時代背景、文学流派と作家の紹介と簡単な分析に留まっているものも少なくないが、王健宜氏『日本近現代文学史』、葉渭渠氏『日本文学史』（経済日報出版社、2000 年）、李徳純氏『戦後日本文学史論』（訳林出版社、2010 年）などに代表される新しい日本文学史を見て分かるように、中国における日本文学史研究には次の新しい動きが見られる。①日本人著の日本文学史の翻訳、書き写しから主体性のあるものへ；②日本の先行研究を踏まえつつ、中国視点も忘れぬ日本文学史へ；③巨視的な日本文学史からジャンル別に細分化された日本文学史へ；④教科書的な日本文学史から新しい日本文学史への問題提起を含んだ研究書へと変わりつつある。そこに日本文学研究体制への質疑、中国における研究現状への反省、新しい研究姿勢と方法論への模索がうかがわれる。

【記事執筆：楊 偉

（法政大学国際日本学研究所外国人客員研究員・四川外国語学院日本学研究所所長）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

1st East Asian Culture Research Meeting of 2011

“New Developments in Chinese Research into the History of Japanese Literature: in reference to *A History of Modern Japanese Literature* by Wang Chien-i”

Presenter: YANG Wei (Visiting Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Director, Japanese Studies Institute, Sichuan School of Foreign Languages)

Date: Wednesday, 27 April 2011, 18:00-20:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 26F Conference Room C

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Center for International Japanese Studies)

I compared the recent volume from “History of Japanese Modernization Research Collection”, *A History*

of Modern Japanese Literature by Wang Chien-i (March 2010) with previous research, to highlight its features and new viewpoints. My presentation also considered the progress of Chinese research in Japanese literature, and any influence mutually acknowledged between Japan and China. Wang Chien-i’s work is comprised of 10 chapters, and gives a comprehensive picture of Japanese modern literature from early Meiji until Heisei. In particular it treats literature alongside historical fact and emphasizes literature’s relation with its era. It presents the following new directions in Japanese literary history unseen in previous research: 1) Towards translation of Japanese literary history written by Japanese, and from recounting to originality, 2) Towards including the China viewpoint in previous Japanese research, 3) Towards division into genre categories, 4) Towards change from textbook-style to research proposing new issues. This raises questions on the established Japanese literary research tradition, encouraging a review of research in China and new research angles and methodologies.

Report by: YANG Wei (Visiting Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Director, Japanese Studies Institute, Sichuan School of Foreign Languages)

战略研究基础形成支援项目“用国际日本学的方法再讨论——对日认识的过去、现在和未来”

研究方法③“‘对日认识’的现状——东亚地区为中心”

2011 年度 第一次东亚文化研究会

中国日本文学史研究的新展开——以王健宜的《日本近现代文学史》为文本

报告者：杨 伟（法政大学国际日本学研究所外国人研究员、四川外语学院日本学研究所所长）

时 间：2011年4月27日（星期三）18:00-20:00

会 场：法政大学市谷校区 BT26楼 C会议室

主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

作为《日本现代化历程丛书》之一的王健宜著《日本近现代文学史》（世界知识出版社、2010年3月出版），是中国最新版的日本文学史。本报告的目的就是以该书为研究文本，将其与此前出版的日本文学史论著进行比较，以验证其中有着怎样的特色和新的视点，并以该文本为切入点，考察中国日本文学研究的进展和动向，探讨其可能

对中日之间的相互认识带来的影响。

王健宜的《日本近现代文学史》共由10章构成，采用了由总体性的历史把握及综合性的视点与精细的作家论及作品论相结合的方法，来考察从明治初期到平成时期的日本近现代文学。该书的最大特色就在于逾越了单纯的文学研究的框架，将文学置于时代的宏大背景之下，并与史实相结合，来凸显文学的时代性。与此前的日本文学史论著相比较，以该书为代表的近年出版的新日本文学史呈现出如下的新动向：①正从对日本人所著的日本文学史的翻译和抄袭逐渐向具有主体性的文学史过渡；②正向在参照日本先行研究的同时，亦不忘中国视点的日本文学史过渡；③由宏观的日本文学史向按类型细分化的日本文学史过渡；④由教科书式的日本文学史向蕴含着挑战新日本文学史的问题意识的研究著作过渡。从这些动向中，可以管窥到对日本文学研究体制的质疑、对中国研究现状的反省以及对新的研究态势和方法论的探索。

【执笔者：杨 伟（法政大学国际日本学研究所外国人研究员・四川外语学院日本学研究所所长）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 《국제일본학 연구방법에 기초한 〈일본의식〉 재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래》 연구③ 〈일본의식〉의 현재-동아시아를 기점으로

2011년도 제1회 동아시아 문화 연구회

중국의 일본문학사 연구에 대한 새로운 전개

—왕 쯤이(王健宜) 著 〈일본 근현대 문학사〉를 텍스트로

보고자: 양 웨이(楊偉·호세이대학 국제일본학연구소 외국인객원연구원·스촨(四川)외국어학원 일본학연구소 소장)

일 시: 2011년 4월 27일(수) 18:00 ~ 20:00

장 소: 호세이대학 이치가야캠퍼스 보아소나드 타워 26층 C회의실

사 회: 왕 민(王敏·호세이대학 국제일본학연구소 교수)

〈일본 현대화 역정 연구총서(日本現代化歷程研究叢書)〉전집 중 한 권으로 중국에서 출판된 최신판 〈일본 근현대문학사〉(왕 쯤이, 세계지식출판사, 2010년3월)를 기존 일본 문학사문서와 비교해 새로운 시점과 특색에 대해 검토했다. 나아가 이 연구서로 중국에서의 일본 문학 연구 진전과 동향을 고찰하고, 중·일간에 상호인

식에 미치는 영향에 대해 알아보는 것이 본 보고의 목적이다.

왕 쯤이씨의 〈일본 근현대문학사〉는 10장으로 구성됐다. 이 책은 전체적인 역사 파악과 종합적인 관점에 상세한 작가론과 작품론을 추가하는 형식으로 메이지(明治) 초기에서 헤세(平成·1989년~현재)까지의 일본 근현대 문학에 대해 고찰했다. 단순한 문학 연구의 틀을 초월해 문학을 시대의 커다란 배경으로 설정하고 역사적 사실과 연관 지어 문학의 시대성을 강조했다. 이것이 가장 큰 특징이다. 기존의 일본 문학사문서와 비교해 본다면, 본서를 비롯한 최근 일본문학사에는 다음과 같은 새로운 동향을 볼 수 있다. ①일본인에 의한 일본문학사 번역 또는 옮겨 쓰기에서 주체성 있는 내용으로, ②일본의 선행연구를 바탕으로 중국의 관점도 추가한 일본문학사로, ③거시적인 일본문학사에서 장르별 세분화된 일본문학사로, ④교과서적 일본문학사에서 일본문학사에 문제제기를 포함한 연구서로 변해가고 있다. 여기에 일본문학 연구 체제에 질의, 중국의 연구현황 반성, 새로운 연구자세와 방법론 모색을 엿볼 수 있다.

【기사집필: 양 웨이

(楊偉, 호세이대학 국제일본학연구소 외국인 객원연구원·스촨(四川)외국어학원 일본학연구소 소장)】



会場の様子

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2011 年度第 2 回東アジア文化研究会

中国における思想史研究の方法論に関する思索

● 報告者：陳 毅立（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）

● 日 時：2011 年 5 月 25 日（水）18:00～20:00

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

● 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

劉岳兵著『日本近現代思想史』（世界知識出版社、2010 年）は、中国教育部人文科学重点研究基地重大項目「日本現代化過程研究」及び日本国際交流基金助成項目「日本近現代史研究」の研究成果をまとめたもので、7 章 51 万字で構成されている。

本書のどの章にも、著者の研究者としての周到な研究成果が反映されている。また、いわゆる専門家が執筆したものではあるが、どの章も学生や一般の読者に読みやすいものになっている。さらに、一般読者に日本近現代思想史の全貌を手軽に把握させるために年表が添付されているだけでなく、日本における日本近現代思想史研究の最新動向を紹介するという意味で、巻末に詳細な参考文献が添付されている。日本思想史の研究に携わるものにとっては、本書の様々な考察と分析は、体系的な日本思想史研究の理論構築に有用な資料と示唆を提供している。

本書の最も注目すべき特色としては、著者が「中国経験」を媒介に日本近現代思想史を把握する方法論を提示したことが挙げられる。それは、少なくとも二つの意味においてである。

第一に、反省としての「中国経験」。つまり、日本の思想家たちは、中国近現代社会で行われた様々な事例を分析・反省することによって、日本近現代化の道を模索する、ということである。第二に、体験としての「中国経験」。それは、日本の思想家たちが中国現地に足を踏み入れてそこから得た原体験を思想的資源として日本社会で活用するということである。

近代日本思想発展の本質を突き詰めてみれば分るように、近代日本思想は確かに西洋思想のエッセンスを貪るように吸収してきたが、それと同時に中国思想の影響はしぶとく生き残っていたのではないだろうか。劉岳兵氏の重要視する「中国経験」は、日本近現代思想史の研究に新たな視角を提供し、日本思想史の内容を充実させるだけでなく、中国近現代思想史を検討するにも重要かつ有効なルートとなるであろう。

「中国経験」を重視する視座は、さらに二つの重要な事実を示唆している。

その一つは、西洋的視点という研究方法論のみに基づいて日本の思想史を構築するのは不十分であり、不適切だという事実である。もう一つは、中国では、一つのまとまった学術領域としての東アジア思想史研究体制が未だ確立していないという事実を明らかにしたことにある。

しかし、本書は日本思想史研究における注目すべき

貢献が盛り込まれているが、「思想史とは何か」という根本的な問いに関する筆者の説明はやや足りないように思われる。この点、序章でもう少し丁寧な解説をしていただけるとよかったのではないだろうか。というのは、日本思想史という分野は、中国の一般の読者にとって、まだ耳慣れない学問領域だからである。

中国では、日本思想史研究が 1980 年代初期から旺盛に展開され、研究者たちの努力によって、現在まで数多くの成果が収められてきた。振り返ってみれば、80 年代まで、日本思想史研究はもちろん、日本文化を対象とする研究さえ殆ど行われていなかったと言える。だからといって、日本思想史研究分野はまったく空白の状態ではない。朱謙之と劉及辰の研究は非常に注目に値する。

80 年代初期の中華日本哲学学会の成立は、中国における日本思想史研究を大いに押し進めた。その時から、中国の日本思想史研究が本格的に展開され始め、研究範囲及び研究視野も大幅に広がった。

しかし、これまで中国の日本思想史研究はある程度成果を上げたが、研究水準は依然初歩的段階にとどまっている。また、一般の読者はもちろん、学者の間で、思想史は難しく取っつきにくいという印象があるため、中国では思想史を専門とする研究者の数がきわめて不足している。今後、中国国内で日本思想史研究領域において突破しなければならないと私が考えるところは、以下の 5 点である。

- ① 近世・近代の日本思想に集中せず、古代、中世、または現代の思想も積極的に取り扱うべきである。
- ② 日本思想史における道教と仏教の役割に関する研究を深めるべきである。
- ③ 専門家を集め、日本思想史に関連する研究叢書を出版し、一般の読者の関心を高めるべきである。
- ④ 他国の思想史研究者たちと積極的に連携を取り、思想史研究に関する切磋琢磨の場を設けるべきである。
- ⑤ 比較思想史研究の場合、従来の比較思想研究の方法、すなわち、西洋と日本、または中国と日本の思想を比較・対照することだけでなく、韓国の思想も視野に入れ、東アジア比較思想史研究を一つの学問領域として確立させるべきである。

【記事執筆：陳 毅立

（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

2nd East Asian Culture Research Meeting of 2011

Speculation on the Methodology of Research into the History of Thought in China

Presenter: CHEN Yili (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Date: Wednesday, 25 May 2011, 18:00-20:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies seminar room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Center for International Japanese Studies)

This report examined the methodology behind research into the history of Japanese thought in China, based on LIU Yuebing's *A History of Modern Japanese Thought* (2010).

This book combines the research results of China Ministry of Education Humanities Research Foundation-sponsored topic “Research into Japanese modernization process” and Japan Foundation-sponsored topic “Research into Japanese modern history”. In particular the work uses the “Chinese experience” as intermediary in its methodology for understanding history of Japanese thought. It provides useful material and suggestions for a systematic theoretical structure in researching the history of Japanese thought that might benefit those engaged in such research.

However, I found the author's explanation in relation to the basic question, “What is the history of thought?” rather lacking. A more careful commentary on this point would have been helpful: it is an academic area still unfamiliar to the general reader in China. Chinese scholars use the term “philosophy” rather than “thought”.

My presentation discussed the relationship between thought and philosophy, the appeal of history of thought, and also issues surrounding research into the history of thought in China.

Report by: CHEN Yili (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目“用国际日本学的方法再讨论——对日认识的过去、现在和未来”

研究方法③“‘对日认识’的现状——东亚地区为中心”

2011年度 第2次东亚文化研究会

关于中国国内思想史研究方法的思索——“以《日本近现代史》为媒介”

报告者：陈 毅立（法政大学国际日本学研究所 客座学术研究员）

时 间：2011年5月25日（星期三）18:00-20:00

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所演习室

主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

本次报告根据刘岳兵所著的《日本近现代思想史》（世界知识出版社，2010年）一书，来探讨中国的日本思想史研究的方法论。该书是中国教育部人文科学重点研究基

地重大项目“日本近代化过程研究”和日本国际交流基金的研究助成项目“日本近现代史研究”的研究成果。尤其令人瞩目的是作者在该书中提出了用“中国经验”来把握日本近现代思想史的方法论。对于从事日本思想史的研究人员来说，该书的种种考察与分析为日本思想史研究的理论构建提供了有用的资料和启示。

当然关于“思想史是什么”这一根本问题，作者的说明略显不足。关于这点，若能再详细地进行一下解说的话，则更便于普通读者的理解。因为在中国，日本思想史研究这一研究领域并非耳熟能详。中国的很多学者更偏爱使用“哲学”一词。本次报告中，报告者就思想与哲学的关系，思想史研究的魅力，以及当今中国思想史研究的问题点等作了具体的探讨。

【执笔者：陈 毅立

（法政大学国际日本学研究所客座学术研究员）】

전략적 연구기반 형성 지원사업《국제일본학 연구방법에 기초한〈일본의식〉재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래》

연구③〈일본의식〉의 현재-동아시아를 기점으로

2011년도 제2회 동아시아 문화 연구회

중국의 사상사연구 방법론에 관한 사색

보고자: 천 이리 (陳 毅立·호세이대학 국제일본학연구소 객원학술연구원)

일 시: 2011년 5월 25일(목) 18:00 ~ 20:00

장 소: 호세이대학 이치가야캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민(王 敏·호세이대학 국제일본학연구소 교수)

이번 보고는〈일본 근현대사상사〉(류 웨빙(劉岳兵), 세계지식출판사, 2010년)를 중심으로, 중국의 일본 사상사 연구방법론을 검토했다. 이 책은 중국 교육부 인문과학 중점연구기지 중요항목 ‘일본 현대화 과정연구’ 및 일본 국제교류기금 조성항목 ‘일본 근현대사 연구’

의 연구성과를 정리한 책이다. 이 책의 주목할 만한 특징은 저자가 ‘중국경험’을 매개로 일본 근대사상사를 파악하는 방법론을 제시했다는 점이다. 일본 사상사를 연구하는 연구자에게 있어 이 책의 여러 고찰과 분석은, 체계적인 일본사상사 연구 이론 구축에 유용한 자료로서 시사하는 바가 크다.

그러나 ‘사상사란 무엇인가?’라는 근본적인 문제에 관한 한 저자의 설명이 조금 부족한감이 있다. 좀 더 자세한 해설이 있었으면 하는 이유는, 중국 연구자들은 ‘사상’이라는 말보다 ‘철학’이라는 말을 더 많이 사용해 왔으며 일본 사상사 분야가 중국의 일반독자에게 아직 익숙하지 않은 학문영역이기 때문이다.

이번 보고서에서 보고자는 사상과 철학과의 관계, 사상사 연구의 묘미, 또한 현재 중국의 사상사 연구의 문제점 등을 구체적으로 검토했다.

【기사집필: 천 이리

(陳 毅立, 호세이대학 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2011 年度第 3 回東アジア文化研究会

中国における近現代日中関係研究の発展と限界

—最新日本研究成果『日本近現代対華関係史』を通じて—

● 報告者：王 雪萍（東京大学教養学部講師、法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）

● 日 時：2011 年 6 月 29 日（水）18:00～20:00

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

● 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

全 10 巻の『日本現代化歷程研究叢書』は、中国近現代史研究の名門南開大学・日本研究院が日本の国際交流基金と中国の教育部の研究助成を得て行われた 10 年間の研究成果として、2010 年に世界知識出版社から出版された。この研究成果は、まさに中国の日本研究の最前線と言える。他方、日清戦争や日中戦争の経験と記憶は、中国における近代日本政治及び国際関係研究に多大な影響を与えてきた。そこで、本報告は上記叢書の一冊、中国の日中関係研究の最新成果である宋志勇・田慶立著『日本近現代対華関係史』の内容と論点分析を通じて、中国における近現代日中関係研究の様相と動向を紹介したい。

本書は近現代の日中関係を時系列で詳細に分析した研究成果であるのみならず、従来の中国での日中関係史研究と異なり、戦前と戦後を一冊の本にまとめた点が注目される。最新の研究成果も取り入れ、終戦によって分断されない、連続した近現代日中関係史の教科書としての役割も果たせる研究書である。

前半部分（第 1 章～第 4 章、戦前部分）執筆者の宋志勇・南開大学日本研究院の副院長は、本プロジェクトの責任者の一人であり、長年日中関係史、日本外交史を研究してきた専門家である。本書における近代史部分は、近代日本外交史を研究してきた著者の知見を踏まえ、日本の最新研究成果を意識した研究成果と言える。外務省によって編集された『大日本外交文書』、『外務省百年』、『日本外交年表並主要文書』、『日本外交文書』、参謀本部が編集した『昭和三年支那事变出兵史』、『満州事变作戦経過概要』など、日本側の一次史料を利用しながら、日本の対中国、対アジア侵略の政策は、明治維新以降徐々に形成された政策であることを立証した。

前近代日本の華夷秩序からの離脱、アヘン戦争の教訓、明治維新後の岩倉使節団によるヨーロッパ訪問に対する分析を通じて、日本の世界認識とアジア認識に変化が見られ、軍勢力拡大の方向に発展した状況を強調した。さらに参謀本部管西局局長の小川又次の『征討清国策（案）』と山県有朋の『外交正論略』、『軍事意見書』を引用して、日本の大陸政策の形成過程を分析し、その後の日清戦争、日露戦争、満州事变、さらに日中戦争へとつながったと結論付けた。日中戦争中の戦況拡大の一因として、日本政府内、軍内部の意見不一致、さらには政府と軍部の意見相違についても分析

した上で、外務省は日本軍の侵略を最終的に後押ししたと主張している。さらに、一部の史料の信憑性を含めて史料批判を行いながらも、宋志勇は日本の史料や研究成果を論拠に、一部の現地軍の暴発的な行動による戦況の拡大はあったものの、日本政府も追認しており、日本の対中国侵略は計画されたものであると説明した。この点は、中国の政府と研究者のこれまでの主張と一致する。

中国の研究者は日本の侵略を長期的に分析して、その計画性を強調する傾向が強いのにに対し、日本の研究者は各事件に関する詳細な実証研究を通じて、計画性が認められないとの結論が主流である。つまり、戦争の計画性をめぐる見解の相違は、研究者を含む日中両国国民間の戦争に対する認識の相違となり、対立の火種は拭き取られていないと言えよう。

本書の後半部分（第 5 章～第 8 章）は、冷戦期から 21 世紀初めまでの日中関係、特に中国が主張する対日民間外交の視点から分析している。本書の題名は「日本の近現代対華関係史」、すなわち、近現代日本の対中政策、特に外交政策が主な研究対象である。そのため、前半部分は日本の対中認識、対中政策を中心に論じられているのにに対し、後半は日本側資料、特に一次史料がほとんど使われず、基本的に中国の研究書あるいは中国語に翻訳された日本の研究書を使用している。日本の対中政策分析よりも、中国側の視点から見た戦後日中関係史を時系列に分析したものである。半面、田慶立が民間交流、貿易交流、文化交流、日本対中 ODA など、戦後日中関係をできるだけ多面的に紹介しようとする姿勢は評価できる。

本書の特に前半部分は、日本側の最新研究成果を意識した反論が数多く見られるなどの点で、研究書としても、大学や大学院で日中関係を専門とする学生の教科書としても高い利用価値を有している。ただし、一部の論点について、使用した史料を注等で明記していないところが信憑性を損ねている。近現代の日中関係史は、日中両国で敏感な話題であるため、論じる際、史料の引用方法など国際基準に合わせた執筆方法に留意すべきであろう。

【記事執筆：王 雪萍（東京大学教養学部講師・法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 3 "Present-day 'Japan-consciousness': in
East Asia"

3rd East Asian Culture Research Meeting of 2011

Development and Limits in Chinese Research of Modern Japan-China Relations: Found in Recent Research, *History of Modern Japan-China Relations*

Presenter: WANG Xueping (Lecturer, College of Arts and
Sciences, University of Tokyo; Visiting Academic
Researcher, Hosei University Research Center for
International Japanese Studies)

Date: Wednesday, 29 June 2011, 18:00-20:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for
International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Center
for International Japanese Studies)

Research results spanning 10 years of Nankai
University's Japan Research Institute were published in
2010 as 10-volume *Nihon genkindai-ka rekitei kenkyu
soshu*. This work is at the frontline of Japan research in

China. My presentation analysed the content and argument
of one volume, SONG Zhiyong and TIAN Qingli's *Nihon
kingendai taika kankei shi*, which constitutes the most
recent results of research into Japan-China relations in
China. In so doing I introduced the overall picture of
Chinese research of modern Japan-China relations.

This research analyses in detail Japan-China
relations in chronological order. Unlike previous Japan-
China research in China, it handles pre- and post-war
in one volume. The first half uses Japanese research,
carrying out an evaluation of the credibility of sources. It
argues persuasively that, despite aggravation by the local
army, the Japanese invasion of China was a planned attack
- which the Japanese government admits. The Chinese
government and scholars also agree upon this. The second
half of the work treats widely Japan-China relations from
the Cold War until the beginning of the 21st century, in
particular people exchange, trade and cultural exchange
and ODA between Japan and China. It is praiseworthy for
its multi-faceted take on post-war Japan-China relations.

Report by: WANG Xueping (Lecturer, University of
Tokyo; Visiting Academic Researcher, Hosei
University Research Center for International
Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目“用国际日本学的方法再讨论—
一对日认识的过去、现在和未来”

研究方法③“‘对日认识’的现状——东亚地区为中心”

2011年度 第3次东亚文化研究会

中国国内近代日中关系研究的发展和局限 —以最新日本研究成果《日本近现代对 华关系史》为中心

报告人: 王 雪萍 (东京大学教养学部讲师、法政大学
国际日本学研究所客座学数研究员)

时 间: 2011年6月29日 (星期三) 18:00-20:00

会 场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研
究所演习室

主 持: 王 敏 (法政大学国际日本学研究所教授)

南开大学日本研究院历尽10年时间完成的研究成果
以全部为10卷的《日本现代化历程研究丛书》的方式在
2010年出版。其研究成可以说是走在日本的日本研究最前
端。在本报告中, 作者对该丛书中的一册, 在中国关于中

日关系研究的最新成果—宋志勇 田庆立著《日本近现代
对华关系史》的内容和论点进行了分析, 并向大家介绍了
中国的近现代中日关系史研究的动向。

该书是按照时间顺序对近现代中日关系进行详细而
系统的分析的研究成果。特别是与以往中国的中日关系史
研究不同, 战前于战后的部分合并为一本。前半部分利用
了日本的研究成果, 在对一部分的史料的可信度进行了史
料批判的基础上, 以日本的史料为论据, 有理有据的论
证了一部分的内容。虽然一些日本在战区的军队在突发情
况下进行的行动一步步导致日军战况的扩大, 但是从日本
政府事实上对那些事实进行了追认的情况等, 分析指出日
本的对华侵略是有计划的行为。这一主张和中国的政府与
学者们的主张基本一致。该书的后半部分对冷战时期到
21时期初期的中日关系, 特别是从民间交流、贸易交流、
文化交流、日本对华援助等多方面多角度, 对战后中日关
系进行分析的姿态值得关注。

【执笔者: 王 雪萍 (东京大学教养学部讲师・
法政大学国际日本学研究所客座研究员)】

전략적 연구기반 형성 지원사업 <국제일본학 연구방법에 기초
한 <일본의식> 재검토—<일본의식>의 과거·현재·미래>
연구③ <일본의식> 현재—동아시아를 기점으로

2011년도 제1회 동아시아 문화 연구회

중국 근현대 중·일관계 연구의 발전과 한계

—최신 일본 연구 성과 <일본 근현대 대중 (対華) 관계사>를 통해서

보고자: 왕 쉘핑 (王雪萍, 도쿄대학 교양학부 강사, 호세
이대학 국제일본학연구소 객원학술연구원)

일 시: 2011년6월29일 (수) 18:00 ~ 20:00

장 소: 호세이대학 이치가야캠퍼스 58년관 2층 국제
일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민 (王敏·호세이대학 국제일본학연구소 교
수)

난카이(南開)대학 일본학연구원의 10년간 연구성
과가 <일본 현대화 역정 연구총서> (日本現代化歷程研
究叢書, 10권 전집)로 2010년 출판됐다.

이 연구성과가 바로, 중국 일본연구의 최전선이라고
할 수 있다. 이번 보고에서는 전집 중 한 권이며, 중국의

중·일 관계 연구의 최신 성과인 <일본 근현대 대중(対
華) 관계사> (쑹 즈용(宋志勇), 텐 칭리(田慶立) 저)의
내용과 논점 분석을 통해 중국의 근현대 중·일 관계 연
구의 양상과 동향을 정리해 소개했다.

이 책은 근현대 중·일 관계를 시계열(時系列)로 상세
히 분석한 연구성과이다. 특히 지금까지 중국의 중·일
관계 연구서와는 달리, 태평양전쟁 전후를 1권의 책으
로 정리한 점에 주목할 수 있다. 전반부에서는 일본의
연구성과를 이용하여 일부 사료(史料)의 신빙성과 사료
에 대한 비판을 하면서 일본 사료를 근거로, 일부 현지
군의 도발적인 행동으로 전황이 확대됐지만 일본 정부
도 그 상황을 주인한 사실에서 일본의 대 중국 침략은
계획된 것이었다고 역설했다. 이 주장은 중국 정부와 연
구자가 주장해 온 것과도 일치한다. 이 책의 후반부는
냉전기에서 21세기 초까지의 중·일 관계, 특히 민간교
류, 무역교류, 문화교류, 일본의 對중국 ODA 등을 폭넓
게 다루고 있어, 태평양전쟁 후 중·일 관계를 다면적으
로 접근한 방법이 평가할 만하다.

【기사집필: 왕 쉘핑 (王雪萍, 도쿄대학 교양학부 강사・
호세이대학 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2011 年度第 4 回東アジア文化研究会

日本警戒論の歴史的脈絡をたどる —米慶余『日本近現代外交史』を読む—

●報告者：馬場 公彦（株式会社岩波書店編集局副部長、学術博士）

●日 時：2011 年 7 月 27 日（水）18：00～20：00

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

●司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

湾岸戦争以後、歴史認識問題や、従軍慰安婦問題をめぐる国民基金の活動に見られるように、日本外交の作法は大きく転回しつつある。即ち外交のアクターは多元的に広がり、外交史は政府（戦前はこれに軍部が加わるが）や外務官僚（さらに関係省庁の官僚）の動向のみを追っているだけでは、その全体像は描けなくなった。外交活動の舞台は、二国間外交から多国間ひいては地域間外交及び国際機関での外交へと広がり、その一方で、経済団体や地方自治体など、さまざまなレベルで重層的に折り重なりつつ複雑に展開されている。

本書は幕末維新の開国期から現代の小泉政権末期まで、ほぼ 150 年を扱うが、外交のアクターについては、戦前期においては官邸及び外務省に対象を定め、侵略の諸側面において軍部の動向を追う。戦後期においては専ら政官に検討の範囲を絞っている。例えば、世論・民間メディア・社会運動・知識人の言説といった「国民外交」的なアクターについては、ごく僅かに第 6 章「第 1 次世界大戦と日本」において、対中 21 カ条要求に際して、内田良平ら黒龍会の中国観について触れられているにとどまり（本書 184 頁）、ほとんど顧慮されていない。その意味では、本書は二国間の政官（「正式接触者」）による対外交渉の政策決定過程をたどるという極めてオーソドックスかつ古典的な旧外交の立場に立つ外交史である。

また本書は、『日本外交史』と称しながら、外交の地理的範囲は東アジア（特に中国）に限定しており、特に戦前期は重要な外交相手であった欧州や、それ以外のアフリカやラテンアメリカに対しては、ほとんど論及されていない。その意味では「日中関係史」でもあるのだが、外交相手である中国の動向や中国の外交当局の動向については全くと言っていいほど検討されていない。従って、本書の性格を忠実に言い表すとすれば、『日本近現代対中・対東アジア外交史』ということになる。

この本書の性格は、日本の対外政策を決定づけて来た日本の対外観を、著者がどう見定めているかという本書のモチーフと強く響き合っている。その対外観とは、戦前は大陸拡張を推進することによる軍事大国として、戦後は日米基軸に依拠した政治経済大国として、常に大国化を実現しようとする願望に貫かれて国策を展開してきたとするものであった。即ち第 1 章から第 9 章までの戦前部分のキーワードは「覇占」「独覇」で、「併呑」による大陸の覇権を確立することにあったとする。その際のポイントは、俗説・通説にあるような、軍部の暴走に政官がやむなく追従したのではなく、政官が主導し天皇が認可したものであったということの脈絡を叙述することにある。これに対し、第 10 章から第 15 章までの

戦後部分のキーワードは「自主」で、アメリカの超大国化に依拠しつつもアメリカに追従したのではなく、自主外交の空間を拡大し、経済大国・政治大国の地歩を、東アジアの近隣地域と国際舞台で確立しようとしたことの脈絡を、政官の動向に狙いを定めて叙述することになった。ここでの「自主外交」というのはネガティブな含意があり、それまでの対外観と国策を改めて選択した「平和憲法」や「日中共同声明の精神」などの国際ルールからの逸脱を意味しており、「日米同盟体制」については、ややアンビバレントな評価に立っている。

このような一貫した視座と単線的叙述を可能にしたのは、依拠する基本史料に負うところが大きい。即ち戦前部分は外務省編纂『日本外交文書（1868-1945）』、同『日本外交年表並主要文書（幕末～終戦）』（いずれも原書房刊）を根本史料とし、部分的に幕末から日清戦争までを描いた第 1-3 章は『日本近代思想大系 12 対外観』（岩波書店刊）に、軍部が全面に出た「満洲」事変・日中戦争から太平洋戦争にかけての第 8・9 章は『現代史資料』（みすず書房刊）からふんだんに引用している。いっぽう戦後は占領前後の第 10 章・11 章は鹿島平和研究所編『日本外交主要文書・年表（1941-1960）』（原書房刊）を根本史料とし、日中国交正常化を扱う第 12 章は田恒主編『戦後中日関係文獻集（1945-1970）（1971-1995）』（中国社会科学出版社）に依拠し、それ以後の時代を扱う第 13-15 章は外務省『外交青書』に依拠している。さらに全体に涉って、鹿島平和研究所編『日本外交史 全 34 巻（幕末～講和後の外交）』（鹿島研究所出版会刊）を踏まえている。

このように、政官（一部軍）当局が残し、主に外務省が整理・編纂した史料に一貫して依拠し、ふんだんに引用していることで、とりわけ同一史料からの引証が可能であった戦前部分については通史の体裁が整っている。戦後は共著であることと、最近の事象について公文書の公開・編纂が整っていないため史料がやや未整理・不統一であることが通史の体裁を難しくし、問題史・主題史の体裁となっている。いずれの部分も先行研究書については、その大半は日本人研究者のものを引いている。

従って本書が提示する史料にも、それによって明らかにされた史実にも、そこに反映された史観も、従来の日本側の研究の一つの流れから大きく逸脱するものではないため、正面から異論を唱えることは難しい（1927 年の「田中上奏文」の取り扱いなどに疑問は残るが。本書 230-231 頁）。とはいえ、通説と大きく異なる知見が提示されていたり、新事実が明らかになるようなことは、ほとんどないと言ってよい。

今後われわれが新たな日中あるいは東アジアの外交史を叙述するときには、これまでの対立と抗争の歴史から信頼と和解のための外交史を編み出していかなければならない。その取り組みはいま始まったばかりであり、その十分な成果を見るに至ってはいない。その新たな作業のためのヒントとして、本書を踏まえたうえで、さらに本書では十分に顧慮されなかった史実や視点を拾い上げていく努力が求められるだろう。それは第1に、冒頭に述べた政府・官僚以外の外交のアクターの存在と機能であるし、第2に、二国間・多国間・地域間・国際外交の相手側のアクターの存在である。とりわけ本書の場合は、中国という外交主体の存在を対象化していかなければならない。第3に、国際秩序を形成する世界的な思想潮流の背景である。二国間外交重視の視点からは、「独覇」「自主」のキーワードに体现されているように、どうしても日本の単独行動主義の印象が強くなる。だが、「近現代史」あるいは「20世紀史」という視座を基礎に据えて日本外交史を見たときに、「近代化」

あるいは「近代性」というプロセスを強調することで、日本の特殊性を打破する契機が得られるだろう。例えば、「万国公法」「勢力均衡」「国際協調」「モンロー主義」「国連主義」「民族自決」「平和主義」「地域主義」などはその時代ごとの国際秩序論の世界潮流であり、日本もその潮流に抗っては国際空間の中で生存することは難しかったし、中国も同様の同時代性の中を生きなければならなかったのではないか。

通史は一貫した視座で歴史を包括的に叙述する方法であり、一国の歩みを単線的に叙述するその一貫性において、本書の動機と結果は相即していると言ってよい。次なるわれわれの課題は、時間的な通覧だけでなく、空間的な通覧を可能にする歴史観と史的方法論を見出していく努力にあるだろう。

【記事執筆：馬場 公彦

(株式会社岩波書店編集局副部長・学術博士)】



馬場 公彦 氏



講義の様子



左：王敏 教授 右：馬場公彦 氏



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project
 “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of
 International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the
 Past, Present and Future”
 Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in
 East Asia”

4th East Asian Culture Research Meeting of 2011

Tracing the Historical Context of the Argument of Warnings to Japan: Reading MI Qingyu 's *History of Modern Japanese Diplomacy*

Presenter: BABA Kimihiko (Deputy General Manager,
 Iwanami Shoten; PhD)

Date: Wednesday, 27 July 2011; 18:00-20:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building
 2F Hosei University Research Center for
 International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University
 Research Center for International Japanese
 Studies)

This work attempts to follow objectively the process

determining Japan's foreign policy from end of Edo-start of
 Meiji until the present-day Koizumi administration, based
 on official documents of the Japanese government (chiefly
 Ministry of Foreign Affairs). It is comprised of 15 chapters,
 9 chapters handling pre-war and 6, post-war, with shared
 authorship in the post-war section. This leads to some
 discrepancy in viewpoint, but it holds mostly together as a
 whole. It limits its geographical sphere of Japan's foreign
 policy to East Asia, particularly China, with hardly a
 mention of the regions of Europe, Africa and Latin America
 etc.

It highlights the process determining pre-war
 continental expansionism, colonialism and invasion policies,
 and traces the post-war road towards Japan's becoming a
 superpower by developing a voluntary political position of
 friendly diplomacy with East Asia while preserving the US
 alliance at the core. This book clearly reveals the historical
 context for the formation of and changes in the argument of
 China's warnings to Japan in relation to Japan becoming a
 superpower.

Report by: BABA Kimihiko (Deputy General Manager,
 Iwanami Shoten; PhD)

战略研究基础形成支援项目“用国际日本学的方法再讨论——对日认识的过去、现在和未来”

研究方法③“‘对日认识’的现状——东亚地区为中心”

2011年度 第4次东亚文化研究会

日本警戒论的历史脉络 ——读米庆余《日本近现代外交史》——

报告者：马场 公彦（株式会社岩波书店编辑局副部长，
 学术博士）

时 间：2011年7月27日（水）18:00-20:00

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研
 究所演习室

主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

《日本近现代外交史》主要根据日本政府（以外务省
 为主）的公开资料，客观追忆了日本从幕末维新到小泉政

权期间对外政策决定过程的轨迹，是一部涉及广泛的力作。
 全书由15个章节组成，战前9章、战后6章。战后部分
 由著者与其它学者共同执笔而成，因此观点上有些许出
 入，但仍保持了整体的连贯性。本书中提及的日本外交政
 策，其地理范围仅限于东亚、尤其是中国、欧洲、非洲、
 拉丁美洲等地区并无涉及。

战前部分，作者以对扩张主义、殖民地主义、侵略
 等政策决定过程的追溯为主线，清晰的描画出日本大陆
 政策本质和内容。而战后，日本以对美同盟为主轴着力发
 展与东亚各国的睦邻友好外交、开拓自主政治空间，同时
 大国化路线日趋明显。通过本书描述的历史事实，我们可
 以清楚地看到中国国内对日本“大国化”警戒论的形成、
 变化的历史脉络。

【执笔者：马场 公彦

（株式会社岩波书店编辑局副部长・学术博士）】

전략적 연구기반 형성 지원사업《국제일본학 연구방법에 기초
 한〈일본의식〉재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래》
 연구③〈일본의식〉의 현재-동아시아를 기점으로

2011년도 제4회 동아시아 문화 연구회

일본 경계론의 역사적 맥락을 돌아보다 —미칭위(米慶余)의〈일본근현대 외 교사〉를 읽는다—

보고자: 바바 기미히코(馬場 公彦·주식회사 이와나미
 (岩波)서점 편집국 부부장·학술박사)

일 시: 2011년 7월 27일(수) 18:00 ~ 20:00

장 소: 호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제
 일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민(王 敏·호세이대학 국제일본학연구소 교
 수)

본서는 바쿠후 말기(幕末) 메이지(明治)유신부터 현
 대 고이즈미(小泉)정권기까지 일본 정부(주로 외무성)
 의 공식자료를 근거로, 일본의 대외정책 결정과정의 자

취를 객관적으로 조사하는데 심혈을 기울인 책이다. 전
 체 15장 구성 중 태평양전쟁 전이 9장, 전쟁 후가 6장
 으로 구성됐다. 태평양전쟁 후 부분은 저자 이외 다른
 기고자와 공동집필로 엮어 약간의 시점 차가 보이지만,
 전체적인 시점은 거의 일관돼 있다. 일본 대외정책의 지
 리적 범위를 동아시아 특히 중국에 한정하고, 유럽, 아
 프리카, 라틴아메리카 등 다른 지역에 대해서는 거의 언
 급하지 않았다.

태평양전쟁 전에 대해서는 일본의 대륙 확장주의, 식
 민지주의, 침략정책 결정과정을 명확히 하고자 했고, 전
 후에 대해서는 대미동맹을 기축으로 하면서 동아시아
 에서는 선린우호 외교로 자주적 정치공간 개척한다는
 대국화 노선이 더욱 현저해 가는 과정을 밝히려 했다.
 본서를 통해 일본의 ‘대국화’에 대한 중국의 일본 경계
 론의 형성과 변용의 역사적 맥락이 뚜렷이 드러나게 될
 것이다.

【기사집필: 바바 기미히코(馬場 公彦, 주식회사

이와나미서점(岩波書店) 편집국 부부장·학술박사)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」

第1回勉強会

日本哲学へのベルクソンの影響 —西田幾多郎と九鬼周造の場合—

● 報告者：アルノー・フランソワ（トゥールーズ第2大学）

● 日 時：2011年6月23日（木）18：30～20：40

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室

● 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）

去る6月23日（木）、18時30分から20時40分にかけて、法政大学国際日本学研究所セミナー室において、法政大学国際日本学研究所（HIJAS）の「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」プロジェクト・アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」の第1回勉強会が開催された。

今回は、トゥールーズ第2大学専任講師のアルノー・フランソワ（Arnaud François）先生を迎え、「日本哲学へのベルクソンの影響—西田幾多郎と九鬼周造の場合—」と題して行われた。講演ではフランス語が用いられ、司会はHIJAS所長で法政大学文学部の安孫子信教授、通訳は日本学術振興会特別研究員の津崎良典氏が務めた。

フランソワ氏は2007年にPUFから出版されたアンリ・ベルクソンの *L'évolution créatrice*（『創造的進化』）の新版の校訂者で、最近では *Bergson (Ellipses, 2008)* や *Bergson, Schopenhauer, Nietzsche. Volonté et réalité* (PUF, 2008) などを上梓した気鋭の哲学者である。

報告の主眼はアンリ・ベルクソンの哲学が日本の哲学に与えた影響を、西田幾多郎の『善の研究』（1911年）と九鬼周造の『「いき」の構造』（1930年）を通して検討することであり、最初に西田を、続いて九鬼を取り上げて議論が進められた。報告の概要は以下のとおりである。

西田が初めてベルクソンの著作を読んだのは1906（明治39）年のことであった。その後、西田がベルクソンを本格的に研究することはなかったものの、『善の研究』には、「生の哲学」や意志（volonté）の重視といったベルクソンの影響が垣間見られる。両者のより具体的な共通点として挙げられるのが、(1) 主知主義、(2) 精神的存在の身体に対する優越、(3) 「生の哲学」と意志（volonté）の重視、(4) 科学に対する実用主義的な態度、である。

一方、『善の研究』において重要な位置を占める「純粹経験」や純粹哲学の概念を、スピノザ、ヘーゲル、ウィリアム・ジェームズなどの著作を通して形成し、スピノザ主義の影響によって「思惟と実践の完全な一致」という考えを得るなど、西田の思想にはベルクソンの哲学以外の要素も大きく作用している。その結果、両者の間の埋めがたい溝として、西田側に、(1) 経験科学を参照しない、(2) 経験の総体を体系として確立しようとする、(3) 自己分化、(4) ヘーゲル的な精神の働き、(5) 自然の統一力の肯定、(6) シェリング的な意志の

重視、という点が指摘され得る。

これに対して、生涯のうちにベルクソンと2度にわたって直接会った経験を持つ九鬼周造とベルクソンの関係は、西田とベルクソンとの関係とは異なるものであった。その理由の一つとして、西田が「不二元論」に依拠し、個別の事象と普遍的な原理との間の同一性や身体を意識現象の一部とする一元論的な態度を取ったのに対し、九鬼は二元論的思考というフランス哲学の発想に共通する思考の様式を持っていたことが挙げられる。

九鬼とベルクソンとの共通点は、以下の3つにまとめられる。すなわち、(1) 「部分から全体」ではなく「全体から部分へ」という意味における全体主義的思考、(2) 唯名論、(3) 所与の存在の不可塑性、可能態と現実態との間の「埋めがたい溝」の肯定、が九鬼とベルクソンとの共通点となる。

確かに、『「いき」の構造』において「内官」という語を用いていることから（語はメニュー・ド・ビランのものであるが）、九鬼とベルクソンとの関係は西田とベルクソンとの関係に比べてより密接であるといえる。また、「ある対象は近似的にしか意味し得ず、表象し得ない」という態度も、ベルクソンとの共通点をなしている。しかし、密接であるがゆえに相違点もより本質的で深刻なものとなって現れる。具体的には、九鬼の「いき」や「媚態」に対する態度は、フッサールの「本質直観」やハイデッガーの「存在の解釈としての解釈学」（「書かれたものへの終わりなき解釈としての解釈学」）を念頭に置いたものであり、これは端的な「直観」をいうベルクソンの実存に対する考えとは異なるものといえる。その意味で、「いき」は、九鬼とベルクソンとの間に生ずる接近と離反の象徴といえ、西田と比べれば相対的にベルクソンに近いが、決定的な点でベルクソンと相違するのである。

報告後に約30分間行われた質疑応答では、「ベルクソンにおける「表現」の意味」や「ベルクソンにとっての「歴史」といった話題をめぐって討議が行われた。「ベルクソンにおける「表現」の意味」についての質問に対し、フランソワ氏は「筆舌に尽くしがたいもの」をめぐるスピノザの議論は合理性と神秘性という二重性に陥ることがあり、ベルクソンも『物質と記憶』の中で「知覚されるためには知覚されないものも含まれている」と主張しており、言語とは全てを言い表せないために存在する」と回答した。

また、「ベルクソンにとっての「歴史」という問いには、「ベルクソンにとって「歴史」が主要な話題になる

勉強報告会

ためには長い年月を要したが、1889年の『意識に直接与えられたものについての試論』の時点で主題的ではないものの取り扱われている。九鬼が念頭に置いたのはデールタイの歴史に対する考えだが、ベルクソンは国際哲学会議でデールタイと対談した際に「歴史」の概念について話し合った。デールタイにとってテキストは解釈の対象であり、ベルクソンにとっては生命を持った理解の対象であり、デールタイとベルクソンの間を隔てるものは解釈学に対する態度である」という答えが示された。

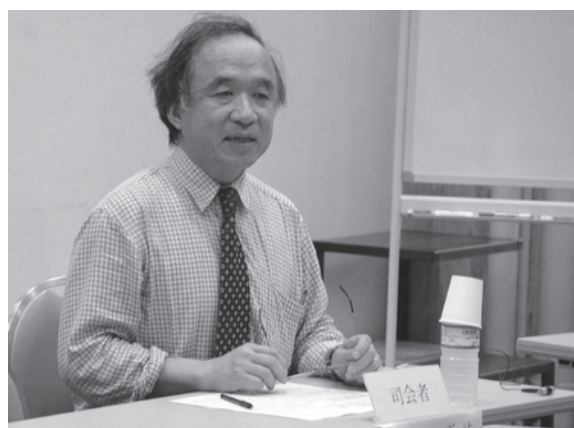
今回の勉強会は、フランソワ氏が提示した「ベルクソンと西田の関係」と「ベルクソンと九鬼の関係」という枠組みを通して、日本の哲学者の思想の普遍性と特殊性、さらに特殊性を生み出した背景が明らかとなった。ベルクソンという哲学を基点として西田と九鬼の哲学を対照させたフランソワ氏の手法は、その意味で「＜日本意識＞の三角測量」というアプローチ④の研究に理論的な手掛かりを与えるものであった。

【記事執筆：鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】



アルノー・フランソワ 氏



安孫子 信 所長(教授)



左：津崎 良典 氏(通訳) 右：アルノー・フランソワ 氏



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”.

“Influence of Bergson on Japanese Philosophy: The Case of Nishida Kitaro and Kuki Shuzo”

Presenter: Arnaud François (University of Toulouse II)
Date: Thursday, 23 June 2011, 18:30-20:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
Chair: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

The project of Hosei University Center for International Japanese Studies (HIJAS) « Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International

Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future » Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future” held its 1st research meeting. On this occasion we welcomed Dr. Arnaud François (Lecturer, University of Toulouse II) who spoke on the subject “Influence of Bergson on Japanese Philosophy: The Case of Nishida Kitaro and Kuki Shuzo”. The presentation focused on the influence Henri Bergson’s philosophy had upon Japanese philosophy, examining Nishida Kitaro’s *Shin no kenkyu* (1911) and Kuki Shuzo’s “*Iki no kozo*” (1930), discussing first Nishida and then Kuki. This shed light on the universality and specificity in the thought of Japanese philosophers, particularly the background that formed its specificity. François’ method of comparing the philosophy of Nishida and Kuki on the basis of Bergson philosophy has offered theoretical clues for research in “Triangulation of ‘Japan-consciousness’”: the theme of Approach 4.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

略研究基础形成支援項目“用国際日本学の方法再討論——対日認識の過去、現在と未来”

研究方法④“‘対日認識’の三角測量——面向未来”

第1次学習会

“柏格森对日本哲学的影响——西田几多郎与九鬼周造”

報告者: Arnaud François (图卢兹第2大学)
時 間: 2011年6月23日(星期四) 18:30-20:30
会 場: 法政大学市谷校区 58年館2層国際日本学研究所演習室
主持人: 安孙子 信 (法政大学国際日本学研究所所長・教授)

法政大学国際日本学研究所(HIJAS)研究項目“用

国際日本学の方法再討論——対日認識の過去、現在と未来”之研究方法④“‘対日認識’の三角測量——面向未来”第1次学習会日前召开。此次会议邀请了图卢兹第2大学专任讲师Arnaud François教授,以“柏格森对日本哲学的影响——西田几多郎与九鬼周造”为题进行了讲座。该讲座的主旨在于通过解析西田几多郎的《善的研究》(1911年)及九鬼周造《「粹」の构造》(1930年)研讨亨利·柏格森对日本哲学产生的影响。通过对西田、九鬼的解读,明确日本哲学家思想的普遍性和特殊性、以及产生特殊性的背景等具体课题。François以柏格森哲学为基点、通过与西田及九鬼哲学的对照研究,给与了“‘対日認識’の三角測量——面向未来”手法④ 诸多理论启示。

【执笔者: 铃村 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客座学术研究员)】

전략적 연구기반 형성 지원사업《국제일본학 연구방법에 기초한〈일본의식〉재검토—〈일본의식〉의 과거·현재·미래》

연구④〈일본의식〉의 삼각측량—미래를 향해

제1회 연구회

일본 철학에서 베르그송의 영향——니시다 기타로(西田幾多郎)와 구키 슈조(九鬼周造)의 경우

보고자: 아르노 프랑수아(투루즈 제2대학)
일 시: 2011년 6월 23일(목) 18:30 ~ 20:30
장 소: 호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
사 회: 아비코 신(호세이대학 국제일본학연구소 소장·교수)

호세이대학 국제일본학연구소(HIJAS)《국제일본학 연구방법에 기초한〈일본의식〉재검토—〈일본의식〉의

과거·현재·미래》연구④〈일본의식〉의 삼각측량—미래를 향해’의 제1회 연구회가 개최됐다. 이번에는 투루즈 제2대학 전임강사인 아르노 프랑수아 교수를 초빙해 ‘일본 철학에서 베르그송의 영향—니시다 기타로(西田幾多郎)와 구키 슈조(九鬼周造)의 경우’라는 제목으로 진행됐다. 보고의 주안점은 앙리 베르그송의 철학이 일본 철학에 미친 영향을, 니시다 기타로의〈선(善) 연구〉(1911년)와 구키 슈조의〈‘이키(粹)’의 구조〉(1930년)를 들어 검토, 논의를 전개했다. 이것으로 일본 철학자의 사상의 보편성과 특수성, 나아가 특수성의 배경이 밝혀졌다. 베르그송이라는 철학을 기점으로 니시다와 구키의 철학을 대조한 프랑수와 씨의 연구방법은, 그 의미로〈일본의식〉의 삼각측량’ 연구④에 이론적 실마리를 제공했다.

【보고자: 스즈무라 유스케

(鈴村 裕輔, 호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業」採択

法政大学国際日本学研究所「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の 悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」プロジェクト

第1回委員会報告

●日 時：2011年2月25日（金）13：30～16：30

●会 場：アルカディア市ヶ谷私学会館7階 会議室「雲取」

法政大学では、平成22年度文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業」における研究プログラムに国際日本学研究所のプロジェクト「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」が採択され、2011年10月1日から本格的な研究が始動しております。このプロジェクトでは、彫刻、絵画、書、法具、及びお札を中心とする日本仏教美術を研究の対象とします。なお、お札の調査・研究は、既にフランス国立科学センター教授・法政大学国際日本学研究所兼担所員のジョセフ・キブルツ先生によって進められており、そのデータベースとのリンクは近いうちに可能になる予定です。更に、袈裟などの染織の分野も調査・研究の対象としなければならないことも、このプロジェクトの研究を始めてから新たに確認されました。

本プロジェクトの研究は、チューリッヒ大学東洋学科長兼日本学科主任教授のクリスティアン・シュタイネック氏と、ヨーロッパでは数少ない日本仏教美術を専門とする同大学非常勤講師で、企画内では法政大学と契約している智恵・シュタイネック氏、東京国立博物館の島谷弘幸氏、丸山士郎氏、伊藤信二氏、弘前大学教授の須藤弘敏氏、神奈川県立金沢文庫の高橋悠介氏、本学国際日本学研究所所長の安孫子信、研究代表者のヨーゼフ・クライナー、小口雅史のほか、王敏、田中優子、澤登寛聡、小林ふみ子が推進しております。

2011年2月25日に研究メンバーが一堂に会して、初めての委員会を開きました。まず全員で確認したのは、優先的な課題である悉皆調査で把握した仏教美術のデータ化についてです。このデータベースは広く一般にも公開するとともに、データは将来にわたって追加し、データベースを更新していくことも再確認致しました。つづいて、ヨーロッパ側で協定を結んでいるチューリッヒ大学のクリスティアン・シュタイネック氏から、チューリッヒ大学にとっての本研究プロジェクトの重要性についての説明がありました。シュタイネック氏によれば、チューリッヒ大学と本学との研究協定は本研究によって初めて活性化し、ヨーロッパにおける日本仏教美術及び仏教の研究が活性化することです。また、欧米の日本研究からみると15年前から「モノ」資料への関心が高まっており、これは仏教研究においても顕著であること、チューリッヒ大学は、自らの予算から本研究に必要なインフラを提供し、資金確保にも力を入れ、助手2名を雇用することが報告されました。次に、調査・研究にあたっている法政大学国際戦略機構特任所員（次年度から籍は法政大学国際日本学研究所に変わる）の智恵・シュタイネック氏から、ヨーロッパでの調査の経過と現状について報告がありました。本学の安孫子所長名義でヨーロッパの120ヶ所以上の

博物館・美術館に協力依頼をし、そのうち既に6割から回答が寄せられました。そのほとんどが本研究を歓迎し、協力する、あるいは資料を提供するという好意的なものでした。既に資料を提供頂いた館もあり、智恵・シュタイネック氏は今年2月までにロンドンで3ヶ所（大英博物館、ビクトリア・アンド・アルバート工芸美術館、ホーニマン博物館）、ノーヴィッジで1ヶ所（セインズベリー美術研究所）、ベルリンで2ヶ所（東洋美術館、民族学博物館）、ベルンで1ヶ所（スイス歴史博物館）、パリで3ヶ所（ギメ国立東洋美術館、ツェルヌスキ・パリ市立東洋美術館、ケーブランリ海外美術館）、プラハで2ヶ所（国立東洋美術館、ナプルステック民族学博物館）の現地調査を終了しました。多くの場合、面談を求めたことが直接良い結果に繋がっております。パリ・ギメ以外のヨーロッパの博物館・美術館には、仏教美術の専門家はおりませんし、日本専門の学芸員さえも少ないため、資料が不揃いという現状を踏まえ、改めて写真撮影等を行う必要があります。その現状に鑑み、3月初めには本学が集積した質問票（エクセルデータベース）をご協力頂いた博物館に送付します。また、クリスティアン・シュタイネック氏は、チューリッヒ大学の予算でポーランドのワルシャワ大学、ボズナン大学の日本学・日本美術史関係者・日本美術関係者との協議を進め、現地での日本仏教美術に関する情報収集をボズナン大学が遂行するという約束を交わされています。更に智恵・シュタイネック氏の下で、チューリッヒ大学のスタッフが今まで出版された仏教美術コレクションに関する展示会図録などの書籍を収集し始めました。それも一つの情報源としています。

この委員会での討論は、質問票（エクセルデータベース）の充実化に集中しました。また、研究陣の幅を広げる必要があることも確認され、東京国立博物館の島谷氏を中心に、京都国立博物館、奈良国立博物館、東京国立文化財研究所の各機関との連携にあたることになりました。

委員会で認識された課題として、ヨーロッパの博物館・美術館に必ず本研究プロジェクトでの調査や研究成果を還元するために、個人的な交流、そして研究協力について何らかの契約条項を設け、双方に意味のある研究体制を構築し推進していくことが確認されました。

2011年度の前半ではまずデータベースの充実化を進め、6月に第2回の委員会、7月に美術の専門家の研究会を開催し、次の課題について検討することを決定致しました。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー

（法政大学国際日本学研究所兼担所員・国際戦略機構特別教授）】

Selected as Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology “Japan Research Promotion Project based on International Cooperation”: Hosei University Center for International Japanese Studies Project “Complete Survey of Japanese Buddhist Art Material Housed in European Museums and its Use in Research of Japan and the Japanese View”

Report of 1st General Meeting

Date: Friday, 25 February, 2011; 13:30-16:30

Venue: Arcadia Ichigaya Shigaku Kaikan 7F Conference Room “Kumotori”

This research project focuses on Japanese Buddhist art, mainly sculpture, painting, calligraphy, ritual articles, dyed fabric such as robes, and talismans, and is run by Professor Christian Steineck of the East Asian Studies Institute at University of Zurich, Tomoe Steineck, Special Adviser at Hosei University, Messrs Shimadani, Maruyama and Ito of the Tokyo National Museum, Professor Sudo of Hiroshima University, Mr Takahashi of Kanazawa Bunko Library, and teaching staff of this university.

It was agreed by all at the committee meeting to prioritize collation of data from the survey. This will be

widely and publicly available, and kept updated. Professor Steineck then explained the importance of this research project in Europe, emphasizing how it will stimulate research in Japanese Buddhist art and in Japan itself. The University of Zurich has provided investment, and 2 assistant scholars. Next, Tomoe Steineck reported on progress of the survey in Europe. Center Director Abiko has requested the cooperation of over 120 museums, and already 60% have responded to welcome the project and to offer material. Tomoe Steineck completed the survey in London, Berlin, Bern, Paris, Prague etc. in February, and will send a questionnaire to cooperating museums in early March.

The committee agreed to ensure that research results from the project be given to the European museums.

The first half of 2011 will be spent optimizing the database. 2nd General Meeting will be held in June, and a research meeting for art specialists in July, when we will discuss our next plans.

Report by: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor and Special Adviser, Planning and Strategy Division)

文部科学省“国際協定推進日本研究事業”選定項目
法政大学国際日本学研究所“欧洲博物馆等所藏日本佛教美术资料全面调查,及以此展开的日本、日本观研究”项目

第1次 全体会议报告

时 间: 2011年2月25日(星期五) 13:30-16:30

会 场: Arcadia市谷私学会馆7层“云取”会议室

国际日本学研究所项目、“欧洲博物馆等所藏日本佛教美术资料全面调查,及以此展开的日本、日本观研究”以雕刻、绘画、书道、法具、包括袈裟在内的洗染服饰,以及钱币等日本佛教美术为研究对象。该研究项目由苏黎世大学东洋学科科长兼日本学科主任教授Christiansson Steineck,法政大学特任研究员智恵Steineck,东京国立博物馆岛谷、丸山、伊藤,弘前大学教授须藤、金沢文庫高桥及本研究所共同实施。

2月25日召开的第一次全体委员会中,与会者首先就将全面调查中收集的佛教美术品数据化并对外公开这一最优先课题达成了共识。同时,各成员一致认为今后有必要继续追加新数据,尽可能丰富和更新数据库。会中,

欧洲方面与会代表Steineck教授对本研究项目的意义进行了说明,再次阐述了着力于加强日本佛教美术及日本研究的重要性。而苏黎世大学则介绍了其在确保研究资金方面的努力。为实施此项目,该校新增了2名研究助手。其后,智恵Steineck研究员介绍了在欧洲各地展开调查的过程和现状。据报告称,目前已经以安孙子研究所名义向120处以上博物馆提交了协助申请,而其中6成对本研究持积极态度,表示愿意提供帮助或相关资料。截至今年2月,智恵Steineck研究员已经完成了在伦敦、柏林、伯尔尼、巴黎、布拉格等地的调查,3月初开始着手将本研究所拟定和积累的问卷(excel 数据库)发送至各协作博物馆。

本届委员会还将本研究项目的成果回馈给欧洲各博物馆达成了合意。2011上半年度先将研究重点放在充实数据库上,6、7月分别召开第2次全体会议和美术专家研究会,以研讨和确定下一步研究课题。

【执笔者: Josef Kreiner

(法政大学国际日本学研究所兼职所员・国际战略机构特别教授)】



ヨーゼフ・クライナー 特別教授



クリスティアン・シュタイネック 教授(チューリッヒ大学)

문부과학성 ‘국제공동연구에 입각한 일본연구 추진사업’ 채택
호세이대학 국제일본학연구소 연구프로젝트 ‘유럽 박물관 보
관 일본 불교미술 자료 총 조사와 그에 따른 일본 및 일본관
연구’

제 1 회 전체회의의 보고

일 시: 2011년 2월 25일(금) 13:30 ~ 16:30

장 소: 알카디아 이치가야 사학회관 7층 ‘구모토리(雲
取)’ 회의실

국제일본학연구소 프로젝트 ‘유럽 박물관 보관 일본
불교미술 자료 총 조사와 그에 따른 일본 및 일본관 연
구’ 는, 조각, 회화, 글, 불구, 가사(袈裟) 등 염색물 및 부
적을 중심으로 한 일본 불교미술을 연구대상으로 한다.
본 연구 프로젝트는 취리히대학 동양학과장 겸 일본학
과 주임교수인 크리스티안 슈타이넥 교수와 호세이대학
도모에 슈타이넥 특임연구원, 도쿄국립박물관의 시마다
니(島谷) 씨, 마루야마(丸山) 씨, 이토(伊藤) 씨, 히로사
키(弘前)대학 스토(須藤) 교수, 가나자와(金沢)문고 다
카하시(高橋) 씨 등과 함께 본 대학 교직원인 추진하고
있다.

2월 25일 처음 열린 위원회에서는 유럽 박물관 조사
를 통해 파악된 일본 불교미술의 데이터화에 대해 전원

의견일치를 보였고 일반에게도 공개하기로 했다. 그리고
지속적인 데이터 갱신을 통해 데이터베이스를 구축해 나
갈 것을 재확인했다. 또한, 유럽 측에서 슈타이넥 교수
가 본 연구 프로젝트의 중요성을 설명하고 일본 불교미
술 및 일본 연구 자체의 활성화를 강조하면서 취리히 대
학은 자금확보에도 주력하고 있으며 이미 조수 2명을 채
용했다고 보고했다. 다음으로, 도모에 슈타이넥 씨가 유
럽 박물관 조사 경과 및 현황에 대해 보고했다. 본 연구
소 아비코(安孫子) 소장 명의로 120 이상의 박물관에
협조의뢰 공문을 보낸 결과, 이 중 60%의 박물관으로
부터 본 연구를 환영하며 협조 또는 자료를 제공하겠다는
호의적 회신을 받았다. 도모에 씨는 2월까지 런던, 베
를린, 베른, 파리, 프라하 등에서 현지조사를 마치고 3월
초에는 본 연구소가 작성한 소장 미술 자료 조사표(엑셀
데이터베이스)를 협조에 응한 박물관에 보냈다고 보고했
다.

위원회는 본 연구 프로젝트의 연구성과를 유럽 박물관
에 환원하는 것을 앞으로의 과제로 확인했으며, 2011
년도 전반에는 먼저 데이터베이스 작업에 주력, 6월에
제2회 전체회의, 7월에 미술 전문가 연구회를 개최해 다
음 과제에 대해 검토할 예정이다.

【기사집필: 요셉 클라이너
(호세이대학 국제일본학연구소 교수·국제전략기구 특별교수)】



智恵・シュタイネック 氏 (チューリッヒ大学)



小口 雅史 教授



左から 伊藤 信二 氏 (東京国立博物館)、丸山 士郎 氏 (東京
国立博物館)、島谷 弘幸 氏 (東京国立博物館)、須藤 弘敏 氏 (弘
前大学教授)



会場の様子

文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業」採択

法政大学国際日本学研究所「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の 悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」プロジェクト

第2回全体会報告

● 日 時：2011年6月17日（金）13：00～17：00

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

文部科学省の「国際共同に基づく日本研究推進事業」に採択され、平成 22-24 年度にかけて行われる法政大学国際日本学研究所「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」の第 2 回全体会議が行われた。

開催の挨拶を当研究所所長の安孫子信がつとめ、本研究プロジェクトのプロジェクトリーダーであるヨーゼフ・クライナーから現在までの進行状況について報告があった。その報告によると、新たにプロジェクトに関わる研究者の紹介が行われ、本年 3 月に行われた国立民族学博物館での国際シンポジウム「在外資料の調査研究—バルト海周辺地域の日本コレクション」で報告を行い、国内外の研究者と意見交換をした。また、フランスのギメ美術館で行われたキブルツ氏の「お札」の特別展覧会にこのプロジェクトの代表として知恵・シュタイネック氏が参加した。6 月には九段校舎別館の 3 階に本プロジェクトの本部を設置し、研究体勢が充実してきていることを感じさせた。

続いて本プロジェクトの大きな目的であるヨーロッパの博物館との交渉状況の報告を、本学国際戦略機構特任所員の智恵・シュタイネック氏が行った。

100 館あまりの博物館に協力要請のための案内状を送り、その内すでに約 3 割の博物館から協力したいとの返信を受け取っている。たくさんの博物館に要請を出しているため、館によって対応の仕方が変わってくるが、各館の要望にあわせて柔軟に対応している。現段階で多忙のため辞退した館も若干あるが、新たに参加が決定した館もあり、欧州の博物館が、本プロジェク

トによせる関心の高さがうかがえる。まだ返信のない館に対しては、参加者が手分けをして個々に問い合わせることになった。

協力できる博物館から、仏教美術の収蔵品に関しての情報をいち早く把握できたものもある。その中で注目すべき作品を数点紹介した。ヨーロッパの博物館が所蔵する仏教美術作品は、未発表の作品が大半をしめており、今後より多くの収蔵品の情報が集まってくると、さらに新史料の発見への期待感が膨らむ。

続いて、報告書とデータベースの作成という実務的な話題について本学教授小口雅史を司会に話し合いがもたれた。データベース作成の大まかな手順を説明し、仏教美術をデータベース化するために必要な細部項目について議論した。

最後に、欧州での仏教美術に関するシンポジウムの予定について話し合われた。そのシンポジウムの一環として、ポーランドのワルシャワ国立博物館において、ヨーロッパで仏教美術を研究・調査している学芸員や研究者を交えて、日本の第一線で活躍する学芸員・研究者が直接現地に赴き、仏教美術に対する関心を深めてもらうためのワークショップを行う計画である。

今後の欧州での所蔵品調査を実施する予定について話し合い、まだ見ぬ欧州の仏教美術作品に思いを巡らした。

【記事執筆：神野 祐太

（法政大学国際日本学研究センター客員研究員）】



全体会の様子

Selected as Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology “Japan Research Promotion Project based on International Cooperation”: Hosei University Center for International Japanese Studies Project “Complete Survey of Japanese Buddhist Art Material Housed in European Museums and its Use in Research of Japan and the Japanese View”

Report of 2nd General Meeting

Date: Friday, 17 June, 2011; 13:00-17:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

The Hosei University Center for International Japanese Studies Project “Complete Survey of Japanese Buddhist Art Material Housed in European Museums and its Use in Research of Japan and the Image of Japan”, which was selected as a Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology “Japan Research

Promotion Project based on International Cooperation” for 2010-2012, held its 2nd General Meeting.

First of all, Project Leader, Josef Kreiner reported on the state of progress so far, and this was followed by a report by Special Adviser of Planning and Strategy Division, Tomoe Steineck on the circumstances of negotiations with European museums. Hosei University Professor, Oguchi Masashi then led exchange of opinion on the practical matters of reportage and database production. Finally, plans for a symposium were discussed relating to Buddhist art in Europe.

Discussion ensued on plans for carrying out future fieldwork in European collections, and there was speculation about still unseen Buddhist works of art held in Europe.

Report by: JINNO Yuta (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

文部科学省“国際協作推進日本研究事業”選定項目
法政大学国際日本学研究所“欧洲博物館等所藏日本佛教
美術資料全面調査、及以此展開の日本、日本観研究”

第2次全体会議報告

時 間：2011年6月17日（星期五）13:00-17:00

会 場：法政大学市谷校区58年館2層国際日本学研究所
演習室

作为文部科学省“国際協作推進日本研究事業”の
選定項目之一，法政大学国際日本学研究所将于平成22
年度实施“欧洲博物館等所藏日本佛教美術資料全面
調査、及以此展開の日本、日本観研究”項目。6月17日，

该项目召开了第2次全体会议。

会议中首先由研究项目主要负责人Josef Kreiner教授对目前的进展状况加以汇报，本校国际战略机构特任所员Steineck智恵也简要介绍了与欧洲各地博物館的交涉情况。之后，与会者就报告书及数据库的制作等事务性课题展开了讨论，法政大学教授小口雅史担任讨论主持。会议最后还商议了欧洲佛教美術研討会的举办日程。

今后，关于欧洲各地收藏品調查的讨论仍将继续进行，以期发掘出更多尚不为世人知晓的佛教美術作品。

【执笔者：神野 祐太

（法政大学国際日本学研究中心客座研究員）】

문부과학성 ‘국제공동연구에 입각한 일본연구 추진사업’ 채택
호세이대학 국제일본학연구소 연구프로젝트 ‘유럽 박물관 보
관 일본 불교미술 자료 총 조사와 그에 따른 일본 및 일본관
연구’

제2회 전체회의의 보고

일 시：2011년 6월 17일(금) 13:00 ~ 17:00

장 소：호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제
일본학연구소 세미나실

호세이대학 국제일본학연구소는 문부과학성 ‘국제공
동연구에 입각한 일본연구 추진사업’에 채택되어 ‘유럽
박물관 보관 일본 불교미술 자료 총 조사와 그에 따른
일본 및 일본관 연구(2010~2012년도)’ 프로젝트의 제2
회 전체회의를 열었다.

먼저 본 연구 프로젝트의 프로젝트 리더인 요셉 클라
이너 교수가 현재까지의 진행상황에 대해 보고하고 다
음으로 호세이대학 국제전략기구 특임 연구원인 도모에
슈타이넵 씨가 유럽 박물관과의 교섭상황을 보고했다.
계속해서 보고서와 실무적인 안건(데이터베이스 작성)에
대해서는 오구치 마사시(小口雅史) 교수가 사회를 맡아
진행했다.

마지막으로 유럽 불교미술에 관한 다음 심포지엄 일
정과 앞으로의 유럽 소장품 조사 일정에 대해 논의했으
며 아직 보지 못한 유럽의 불교미술 작품에 대해 여러모
로 의견을 나눴다.

【기사집필：진노 유타

（神野 祐太, 호세이대학 국제일본학연구소센터 객원 연구원）】

文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業」採択

法政大学国際日本学研究所「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の
悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」プロジェクト

第1回ワークショップ

●日 時：2011年7月28日(木)、29日(金)

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパスボアソナードタワー 25 階
C 会議室（7月28日）・東京国立博物館（7月29日）

研究プロジェクトの進捗状況、データベース構築進捗状況、今後の研究
計画について話し合いを行った。



会場の様子

文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業」採択

法政大学国際日本学研究所「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の
悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」プロジェクト

ギリシャ国立東洋美術館所蔵の日本絵画調査から —特に佛教絵画の紹介を中心にして—

- 報告者：河合 正朝（公益財団法人 出光美術館常勤理事、慶應義塾大学名誉教授）
- 日 時：2011年2月25日（金）17：00～19：00
- 会 場：法政大学九段校舎3階 遠隔講義室
- 挨拶：増田 寿男（法政大学総長）
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼担所員、国際戦略機構特別教授）

去る2月25日（金）、法政大学九段校舎3階遠隔講義室において、講演会「ギリシャ国立東洋美術館所蔵の日本絵画調査から—特に佛教絵画の紹介を中心にして—」が開催された。

今回の講演会は、文部科学省の「国際共同に基づく日本研究推進事業」に採択され、平成22-24年度にかけて行われる法政大学国際日本学研究所「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」の一環として企画され、講師は慶應義塾大学名誉教授で公益財団法人出光美術館常勤理事の河合正朝氏が務めた。

河合氏は、2008年7月23日から7月30日まで、ギリシャのコルフ島にあるギリシャ国立コルフ東洋美術館（The Asian Art Museum of Corfu, Greece）で実施した、美術館が所蔵する日本絵画の調査について報告を行った。講演の概要は以下の通りである。

ギリシャ国立コルフ東洋美術館はギリシャの外交官で貴族のグレゴリオス・マノス（1850-1928）が収集した美術品をギリシャ政府が購入し、1928年に開館した。マノスは20歳頃からウィーンに渡って活躍し、後にはオーストリア・ハンガリー駐在大使を務めた人物で、外交官時代から日本の美術品を収集していた。外交官を引退してからはパリに居を移して収集を続け、ヨーロッパにジャポニズムの流行をもたらしたゴンクール兄弟から浮世絵を購入するなど、「貴族の趣味」という域に止まらない活動を行った。1928年に美術館が開館した当時、収蔵品の数は約9500点で、その内3分の2を日本の美術品が占め、とりわけ浮世絵や陶磁器は2000点以上であった。肉筆画の数が200点程度であったことを考えれば、マノスの興味や関心の対象が浮世絵や陶磁器に向けられていたことが分かるといえよう。

さて、今回はギリシャ国立コルフ東洋美術館が所蔵する日本の美術品のうち、仏教絵画28点を対象として調査が行われた。具体的には、各作品を詳細に調べ、作者や制作年代、品質、形状を同定し、それぞれについて来歴や特徴、あるいは落款や画賛がどのようなものであるかを検討した。その結果、28点の大部分が江戸時代に制作され、最も古いものが室町時代、最も新しい作品は明治時代に作られたということが分かった。ただし、江戸時代といっても制作の年代には幅があり、具体的に制作年代が特定できたのは、「二祖上人図」（天明7年5月）、「弁才天像」（文政6年4月）など数点のみであった。

所蔵品の中には、少なからぬ贋作が含まれていた。

例えば、江戸時代後期に制作されたと思われる「十二弁天像」は、鎌倉時代の作品であることを想定して江戸時代後期に輸出用に作られた擬古作で、贋作の可能性があった。また、「如来像」には古色が付けられているが衣紋と獅子が狩野派の画法で描かれており、19世紀の贋作であった。一方、真作もあり、「天部像」には「探幽」の朱文方印が押されており、狩野探幽（1602-1674）の真作と認められる作品であった。なお、この「天部像」は、狩野探幽が目に触れた古画を縮小模写したものを一巻に集めた図巻である「探幽縮図」の一部を切って表具したもので、明治時代にはすでにこのような鑑賞画としての扱い方があったことを示す興味深い事例であった。

ところで、ギリシャ国立コルフ東洋美術館の所蔵品は、その多くが補修補彩されていた。これは、明治時代になって日本の絵画が欧米に本格的に輸出されるようになると、年月を経て古色蒼然とした作品よりも鮮やかな彩色の施されたものの方が高値で取引されたために起きた、当時としては一般的な現象であった。また、外国人が日本の美術品を収集する際、日本に直接赴く場合には贋作を購入する可能性は低くなるが、日本国外で集める場合には輸出用に制作された擬古作や贋作を真作として購入することが多くなる。マノスの場合、ウィーンとパリを拠点として活動し、ゴンクール兄弟などから浮世絵を購入したことから分かるように、日本を訪問することはなかった。そのため、マノスは贋作を購入する可能性が高くなり、結果的に美術館の収蔵品自体が贋作を多く含むこととなった。

現在、美術館の収蔵品数は約1万8000点と開館時の倍近くになっており、日本関連の収蔵品の数も増えている。2008年の調査では狩野山楽の「牧場図屏風」が美術館に収蔵されていることが判明するという成果があった。そのため、収蔵品の調査が新たな発見を生む可能性があり、未調査の所蔵品、特に陶磁器や彫像などについての調査の実施が望まれる。

以上のような報告の後、ヨーロッパにおいて日本の美術品を収蔵することで知られている、ランゲン財団（ランゲン・コレクション、ドイツ）、リンデン民族学博物館（ベルツ・コレクション、ドイツ）、ギメ美術館（フランス）、大英博物館（イギリス）などの諸機関についても言及があった。ギリシャ国立コルフ東洋美術館から出発してヨーロッパ各地の美術品の収蔵状況へと至る視点は本研究プロジェクトにとっても有意義なもので、美術品の実際の写真を交えて行われる河合氏の説

講演会報告

明とあいまって、今回の講演は極めて示唆に富む内容となった。

【記事執筆：鈴木 裕輔
(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】



河合 正朝 氏



増田 寿男 総長



ヨーゼフ・クライナー 特別教授



会場の様子



講演の様子



講演の様子

Selected as Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology “Japan Research Promotion Project based on International Cooperation”: Hosei University Center for International Japanese Studies Project “Complete Survey of Japanese Buddhist Art Material Housed in European Museums and its Use in Research of Japan and the Japan”

“Research of Japanese Paintings in the Collection of the Asian Art Museum of Corfu, Greece: in particular an Introduction to its Buddhist Painting”.

Presenter: KAWAI Masatomo (Executive Director of Idemitsu Museum of Arts and Professor Emeritus, Keio University)

Date: Friday, 25 February, 2011; 17:00-19:00

Venue: Hosei University Kudan Building 3F Remote Conferencing Room

Greeting: MASUDA Toshio (President, Hosei University)

Chair: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University Center for International Japanese Studies; Professor and Special Adviser, Planning and Strategy Division)

For this Special Lecture Meeting we welcomed KAWAI Masatomo, Professor Emeritus of Keio University and Executive Director of Idemitsu Museum of Arts. He spoke about his research of Japanese paintings held in the collection of the Asian Art Museum of Corfu, Greece that he surveyed from 23-30 July 2008. The lecture introduced the details of research conducted on 28 Buddhist paintings from among the Japanese works of art housed there. His results showed that more than half of them dated from the Edo period, while the oldest, from Muromachi, and the newest, from Meiji. He suggested that this survey of the artifacts might lead to new discoveries, and he was anticipating a survey of objects not yet researched such as ceramics and sculpture. Among other things, the lecture provided us with invaluable knowledge about the collections of art galleries etc. in Europe known to house objects of Japanese art.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

文部科学省“国際協定推進日本研究事業”選定項目
法政大学国際日本学研究所“欧洲博物馆等所藏日本佛教美术资料全面調査，及以此展开の日本、日本観研究”

“希腊国立东洋博物馆所藏日本绘画调查——以佛教绘画介绍为中心”

报告者：河合 正朝（公益財団法人 出光美術館常务理事、庆应义塾大学名誉教授）

时 间：2011年2月25日（星期五）17:00-19:00

会 场：法政大学九段校舍3层 远程讲义室

致 辞：増田 寿男（法政大学校长）

主持人：Josef Kreiner（法政大学国際日本学研究所兼任研究员、国際戦略機構特別教授）

本次讲座我们邀请到了庆应义塾大学名誉教授、公

益財団法人出光美術館常务理事、河合正朝先生。河合先生就2008年7月23日到7月30日之间对位于希腊克里岛的希腊国立克里东洋美术馆(The Asian Art Museum of Corfu, Greece)所藏日本绘画的调查情况作了说明。报告中，他详细介绍了对希腊国立克里东洋美术馆所藏日本美术展品中28件佛教绘画的调查结果。28件作品大部分在江户时代制成，年代最久远的诞生于室町时代，最新作品为明治时代。对收藏品详细调查会成为新发现的契机，因此与会各方希望该调查的范围也能扩大到其他藏品，尤其是陶瓷器、雕像等。另外，河合先生还对以保存日本美术品而著称的欧洲各大美术馆藏品进行了说明，报告内涵丰富。

【执笔者：铃村 裕辅

（法政大学国際日本学研究所客座学术研究员）】

문부과학성 ‘국제공동연구에 입각한 일본연구 추진사업’ 채택
호세이대학 국제일본학연구소 ‘유럽 박물관 보관 일본 불교미술 자료 총 조사와 그에 따른 일본 및 일본관 연구’ 프로젝트

그리스 국립박물관 소장 일본 회화 조사 — 불교 회화 소개를 중심으로

보고자：가와이 마사토모(河合正朝·공익재단법인 이데미쓰미술관 상근이사·게이오기주쿠(慶應義塾)대학 명예교수)

일 시：2011년 2월 25일(금) 17:00~19:00

장 소：호세이대학 구단(九段)교사 3층 원격강의실

인 사：마스다 토시오(増田壽男·호세이대학 총장)

사 회：요셉 클라이너(호세이대학 국제일본학연구소 겸임 연구원·국제전략기구 특별교수)

이번 강연회는, 공익재단법인 이데미쓰 미술관 상근이사이며 게이오기주쿠(慶應義塾)대학 명예교수인 가와이 마사토모(河合正朝) 교수를 맞이해, 그리스 코르프

섬에 있는 그리스 국립 코르프 동양미술관(The Asian Art Museum of Corfu, Greece)에서 실시(2008년 7월 23일~30일)한 미술관 소장 일본 회화 조사에 대한 보고를 받았다. 그리스 국립코르프 동양미술관 소장 일본 미술품 중, 불교회화 28점을 대상으로 한 조사에서 28점 대부분이 에도(江戸)시대에 그려졌고 가장 오래된 작품은 무로마치(室町)시대, 가장 최근 작품은 메이지(明治)시대 작품이라는 것이 밝혀졌다. 또한, 수장품 조사는 새로운 발견으로 이어질 가능성이 있어 미조사 소장품, 특히 도예품과 조각 등에 대한 조사가 이뤄져야 한다는 지적도 있었다. 이번 강연에서는 이 외에도 유럽에서 일본 미술품을 수장하고 있다고 알려진 미술관의 소장품에 대한 소개도 있어, 시사하는 바가 큰 강연이었다.

【기사집필：스즈무라 유스케

(鈴村 裕輔, 호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業」採択

法政大学国際日本学研究所「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の
悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」プロジェクト

大英博物館を彩った日本美術 —明治期の日英文化交流を中心に—

● 報告者：彬子女王殿下（立命館大学衣笠総合研究機構 ポストドクトラルフェロー）

● 日 時：2011 年 6 月 24 日（金）17：00～19：00

● 会 場：法政大学九段校舎 3 階 遠隔講義室

● 挨拶：増田 寿男（法政大学総長）

● 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼担所員、国際戦略機構特別教授）

今回の講演会は、文部科学省の「国際共同に基づく日本研究推進事業」に採択され、平成 22-24 年度にかけて行われる法政大学国際日本学研究所「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」の一環として企画された。講師は立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェローの彬子女王殿下が務めた。

彬子女王は、2010 年 1 月に留学先であるオックスフォード大学より博士の学位を取得し、今年 5 月に学位授与式が行われたばかりで、今回の講演の内容もその博士論文の一部である。

講演の論題は「大英博物館を彩った日本美術—明治期の日英文化交流を中心に—」であり、具体的な内容は、「大英博物館に所蔵される日本美術の作品を通して、日本をどのようにとらえ知ろうとしていたのか」という日本観の形成に関する研究である。我々のプロジェクトとも密接に係る研究テーマであるため、今回の講演会への出講を招聘するに至った。講演の概要は以下の通りである。

大英博物館は、現在では絵画・版画・陶磁器・漆器・根付・染色品など多岐にわたる日本美術作品を所持しており、その数はおおよそ 3 万点にも及ぶ。本講演では、このコレクションの基礎を築いた立役者である 3 人の人物と、大英博物館を拠点とした日英文化交流を通し、明治期の大英博物館において「日本美術史」がどのように形成されていったかを検証する。大英博物館の日本美術コレクションの礎を築いた 3 人の人物とは、すなわち、ウィリアム・アンダーソン、オーガスタス・ウォラトストン・フランク、ウィリアム・ガウランドであり、今回はアンダーソンの活動と大英博物館における日本美術の定着への寄与に焦点を当てる。

アンダーソンはロンドンのセント・トマス病院の助手として働く医師であった。しかし、当時日本の明治政府が新たに設立した帝国海軍医学校・海軍病院の教授に任命され、約 6 年間、いわゆる「お雇い外国人」として日本で過ごすこととなった。医師として活躍するかわら、アンダーソンは日本・中国の絵画の蒐集を行った。日本に滞在中に入手した作品の数は、約 3000 点にもものぼり、イギリスに帰国後の 1881 年、大英博物館へ約 3000 ポンドで売却した。

当初、大英博物館側は、アンダーソンの蒐集品の受け入れに難色を示していたが、学芸員のフランクらの調査を経て、購入を決定した。フランクは大英博物館に 40 年以上も勤めた人物で、あらゆる分野の收藏

品の補強を行った。このフランクの進言があったからこそアンダーソン・コレクションは大英博物館に入ることとなった。しかしながら、フランク自身は日本を訪れたことはなかった。

アンダーソン・コレクションの形態別内訳は、掛幅 986 点、画卷 95 点などであり、他は「まくり」の作品である。「まくり」とは美術作品とみなされないような未表装の下絵類であり、安価に、しかも大量に購入することができ、日本美術を体系的にとらえ紹介したいアンダーソンには最適の対象であった。画派別にアンダーソン・コレクションをみると、狩野派が 23.6% と最も多く、中国派（雪舟、文人画、南蘋派などの中国絵画の影響を受けた画家）、浮世絵、円山四条・岸派と続く。時代別には、江戸時代後期の作品がそのほとんどを占めている。これらのことから日本の絵画を美術作品としてみようとしたアンダーソンの蒐集態度がみられる。アンダーソンは『大英博物館蔵の日本・中国絵画カタログ』（1886 年）と『日本の絵画芸術』（1886 年）を出版し、『日本の絵画芸術』は、1896 年に末松謙澄によって日本語に訳され、『日本美術全書』と改題され出版された。これは日本美術を古代から時代ごとに区別し、作家の紹介を行った初の書物であった。最初の日本美術の通史は、1900 年のパリ万国博覧会に際してフランス語で出版された『稿本日本帝国美術略史』であり、アンダーソンは日本人が自国の美術品を美術と認識せず、その歴史を編纂する以前に、このようなコレクションを形成し本まで出版している。『稿本日本帝国美術略史』の作成に深く関わった九鬼隆一と佐野常民が『日本美術全書』に緒言を書いていることから、アンダーソンの著作が日本の美術史の形成に影響を与えていたといえよう。

そして、アンダーソン・コレクションが大英博物館に入ることになり、日本美術は世界の美術に比肩するものであることが認識された。

以上のような報告があり、アンダーソンという蒐集家の伝記的研究だけでなくアンダーソン・コレクション自体の歴史を辿ることで、西洋における日本美術への関心の変遷が解き明かされた。このような視点は、「美術品を通して収集者の日本観を探る」という本研究プロジェクトにとって、大変有意義なものであった。

【記事執筆：神野 祐太

（法政大学国際日本学研究所センター客員研究員）】

Selected as Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology “Japan Research Promotion Project based on International Cooperation”: Hosei University Center for International Japanese Studies Project “Complete Survey of Japanese Buddhist Art Material Housed in European Museums and its Use in Research of Japan and the Japanese View”

“Japanese Art collected by The British Museum: focusing on Cultural Exchange between Japan and Britain in the Meiji Period”

Presenter: Princess Akiko of Mikasa (Postdoctoral Fellow, Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University)

Date: Friday, 24 June, 2011; 17:00-19:00

Venue: Hosei University Kudan Building 3F Remote Conferencing Room

Greeting: MASUDA Toshio (President, Hosei University)

Chair: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor and Special Adviser, Planning and Strategy Division)

This keynote address was scheduled as part of the Hosei University Center for International Japanese Studies Project “Complete Survey of Japanese Buddhist Art Material Housed in European Museums and its Use in Research of Japan and the Japanese View”.

The speaker was Princess Akiko of Mikasa, Postdoctoral Fellow of Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University. Her research handled the formation of a view of Japan, asking, “How was Japan seen and known through the works of art belonging to The British Museum?” She discussed in detail the formation of The British Museum’s Japanese art collection, raising in particular the important figure, William Anderson.

Not only through biographical research of the collector, Anderson, but also by tracing the history of the Anderson Collection itself we can understand the changes in Western interest in Japanese art. The standpoint adopted here of “seeking the collector’s view of Japan through works of art” was a significant contribution to this research project.

Report by: JINNO Yuta (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)



彬子女王殿下



増田 寿男 総長



ヨーゼフ・クライナー 特別教授



会場の様子

文部科学省“国际协作推进日本研究事业”选定项目
法政大学国际日本学研究所“欧洲博物馆等所藏日本佛教
美术资料全面调查，及以此展开的日本、日本观研究”

“装点大英博物馆的日本美术——以明治 时代日英文化交流为中心”

报告者：彬子女王殿下（立命馆大学衣笠综合研究机
构客座研究员）

时 间：2011年6月24日（星期五）17:00-19:00

会 场：法政大学九段校区3层 远隔讲义室

致 辞：増田 寿男（法政大学校长）

主持人：Josef Kreiner（法政大学国际日本学研究所
兼任研究员、国际战略机构特别教授）

本次讲座是文部科学省“国际协作推进日本研究事
业”选定项目、平成22至24年度由法政大学国际日本学研
究所负责实施的“欧洲博物馆等所藏日本佛教美术资料全

面调查，及以此展开的日本、日本观研究”的组成部分。

特邀讲师为立命馆大学衣笠综合研究机构客座研
究员、彬子女王殿下。讲座题目为“装点大英博物馆的
日本美术——以明治时代日英文化交流为中心”，通过研
究大英博物馆日本美术藏品，探求该时期西方了解日本
的方式方法，即对日认识的形成过程。尤其将William
Anderson作为主要研究人物，对大英博物馆日本美术的
形成作了详细论述。

该研究不仅回顾了Anderson作为收藏家的历程，同
时还通过对其收藏史的追溯解读西洋社会对日本美术关
心的变迁过程。“通过美术作品探索收藏家对日认识”，
该研究项目意义重大。

【执笔者：神野 祐太

（法政大学国际日本学研究中心客座研究员）】

문부과학성 ‘국제공동연구에 입각한 일본연구 추진사업’ 채택
호세이대학 국제일본학연구소 연구프로젝트 ‘유럽 박물관 보
관 일본 불교미술 자료 총 조사와 그에 따른 일본 및 일본관
연구’

대영박물관을 장식한 일본미술—메이 지(明治)기 일·영 문화교류를 중심 으로—

보고자: 아키히코 여왕 전하(彬子女王殿下·리쓰메이칸
(立命館)대학 기누가사(衣笠)연구기구 포스트
닥터 연구원)

일 시: 2011년 6월 24일(금) 17:00 ~ 19:00

장 소: 호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제
일본학연구소 세미나실

인 사: 마스다 도시오(増田壽男·호세이대학 총장)

사 회: 요셉 클라인너(호세이대학 국제일본학연구소
연구소위원·국제전략기구 특별교수)

이번 강연회는 문부과학성 ‘국제공동연구에 입각한

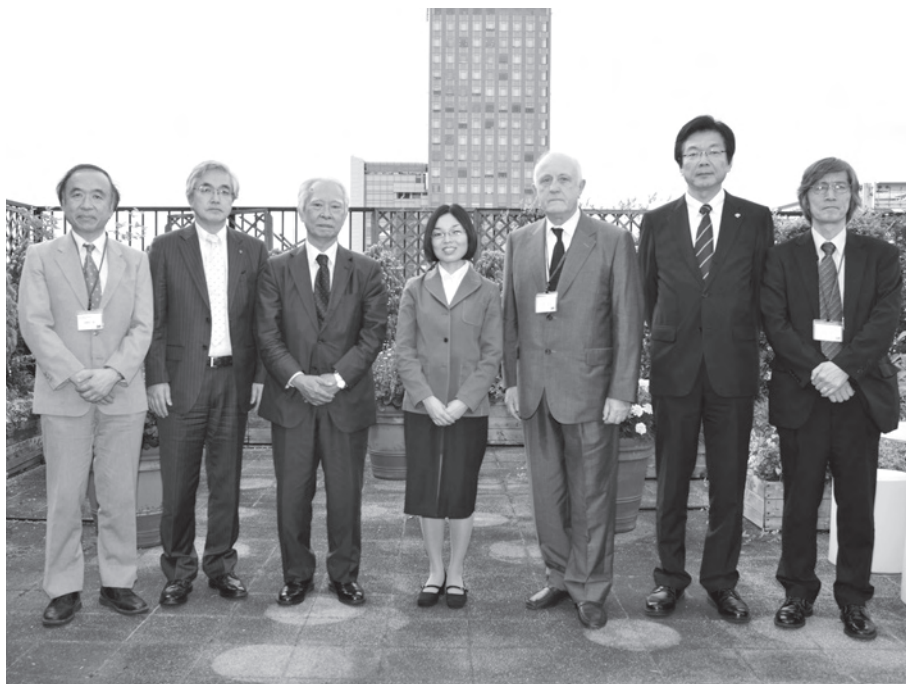
일본연구 추진사업’에 채택된 호세이대학 국제일본학연
구소 ‘유럽 박물관 보관 일본 불교미술 자료 총 조사와
그에 따른 일본 및 일본관 연구(2010 ~ 2012년도)’의
일환으로 기획됐다.

강사는 리쓰메이칸대학 기누가사 연구기구 포스트 닥
터 연구원인 아키히코 여왕 전하께서 맡아 주셨다. 강연
주제는 ‘대영박물관을 장식한 일본미술—메이지(明治)기
일·영 문화교류를 중심으로—’, 구체적인 내용은 ‘대영
박물관에 소장된 일본미술 작품을 통해 일본을 어떻게
이해하려고 했는가.’라는 일본관 형성에 관한 연구다.
이 중 특히 중요 인물인 윌리엄 앤더슨을 중심으로 대영
박물관의 일본미술 형성에 대해 상세하게 논했다.

수집가 앤더슨의 전기적 연구만이 아닌 앤더슨 컬렉
션 자체의 역사를 거슬러 올라가 연구함으로써 서양의 일
본미술에 대한 관심의 변천을 밝힐 수 있었다. 이러한 시
점은 ‘미술품을 통한 수집가의 일본관’이라는 본 연구
프로젝트와 상통하는 바 있어 매우 유익한 강연이었다.

【기사집필: 진노 유타

(神野 祐太, 호세이대학 국제일본학연구소 센터 객원 연구원)】



三笠宮彬子女王殿下を囲んで

サカエ・ムラカミ・ジルー先生の研究所訪問

● 日 時：2011年1月17日(月) 17:00～
● 場 所：法政大学国際日本学研究所(HIJAS)

フランス・ストラスブール大学のサカエ・ムラカミ・ジルー先生が新年早々の1月17日に当国際日本学研究所を訪問されました。アルザス欧州日本学研究所(CEEJA)の副所長も務めておられるムラカミ先生の今回の来日の目的は、CEEJAが計画中の、日本の諸大学を募っての、施設拡大も伴う新たな展開事業への協力要請で、関東関西の主要大学を回られる一環で、法政大学にも立ち寄られました。研究・教育の両面で関係を深めつつある法政は、大学として、このCEEJAの

計画に参与・協力することをすでに決定しており、当日は、所長の安孫子と国際交流センター廣岡課長とがムラカミ先生に、その点での説明を行いました。今回のムラカミ先生の来日を機に、他大学でも同様な決定が成されて、この事業が近い将来に日の目を見ることを期待したいと思います。

【記事執筆：安孫子 信
(法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授)】

Visit to the Center by Professor Sakae MURAKAMI-GIROUX

Date: Monday, 17 January 2011, 17:00-
Venue: Hosei University Research Center for International Japanese Studies (HIJAS)

Professor Sakae MURAKAMI-GIROUX of Strasbourg University, France, visited the Center for International Japanese Studies early in the new year on 17 January. Also Deputy Director of Centre Européen D'Études Japonaises D'Alsace (CEEJA), Professor Murakami's purpose in visiting Japan on this occasion was to gain support from Japanese universities for a new enterprise that includes expansion of facilities, and on

her tour of the main universities in the Kanto and Kansai regions she also paid Hosei University a visit. Hosei continues to uphold its relations with CEEJA in both research and education. As a university it has already agreed to participate and cooperate in CEEJA projects, and it was regarding this point that Professor Murakami spoke to Director Abiko and Mr Hirooka of the International Center. As a result of Professor Murakami's visit, other universities have formed similar ties, and we look forward to fruition of this enterprise in the near future.

Report by: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

Sakae Murakami Giroux 教授访问研究所

時 間：2011年1月17日(星期一) 17:00-
会 場：法政大学国際日本学研究所(HIJAS)

斯特拉斯堡大学的Sakae Murakami Giroux教授于今年1月17日访问了国际日本学研究所。Murakami先生目前担任阿尔萨斯欧洲日本学研究所(CEEJA)副所长职务，他此行目的是就CEEJA设施扩大后设定的新项目寻求日本

各大学的协助。在走访关东、关西各主要大学期间来到法政大学。法政大学在研究和教育两方面有意加强联系，决定积极参与和协助CEEJA计划。当天国际日本学研究所安孙子所长及国际交流中心广冈课长向Murakami教授就此项合作进行了说明。以Murakami教授访日为契机，日本各大学给与积极支持，此项计划也会早日实现。

【执笔者：安孙子 信(法政大学国際日本学研究所所長・教授)】

사카에 무라카미 지르 교수의 연구소 방문

일 시: 2011년 1월 17일(월) 17:00～
장 소: 호세이대학 국제일본학연구소(HIJAS)

프랑스 스트라스부르그대학의 사카에 무라카미 지르 교수가 1월 17일, 국제일본학연구소를 방문해 주셨다. 알자스 구주(欧州) 일본학연구소(CEEJA) 부소장도 겸임하고 계신 무라카미 교수의 이번 일본 방문 목적은, CEEJA의 시설 확대를 포함한 연구소 발전계획에 일본 주요대학의 협조 요청을 위해서이고, 대학 순회 방문일정의 일환으로 호세이대학에도 방문해 주셨다. 호세이대학은 연구·교육 방면에서 CEEJA와 돈독한 유대관계를 맺고 있으며, CEEJA의 계획에 이미 대학 차원에서 참여·협조를 결정한바, 방문 당일에는 아비코(安孫子) 소장과 국제교류센터 히로오카(廣岡) 과장 등이 무라카미 교수에게 이 점에 대해 설명했다. 이번 무라카미 교수의 일본 방문을 계기로 다른 대학도 이같이 동참하여 이 사업이 가까운 시일 내 빛을 발하기 바란다.

【기사집필: 아비코 신
(安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장·교수)】



左より 安孫子信所長(教授)、サカエ・ムラカミ・ジルー教授、鈴木裕輔客員学術研究員

ブルキナファソ ワガドゥグ大学学長 クリディアティ先生の 研究所訪問

- 日 時：2011年3月11日（金）15：00～
- 場 所：法政大学国際日本学研究所（HIJAS）

日本外務省のオピニオン・リーダー招聘で来日中の、西アフリカ、ブルキナファソ共和国の国立ワガドゥグ大学ジャン・クリディアティ学長が、さる3月11日、大震災当日に、法政大学ならびに国際日本学研究所を訪問された。訪問予定時間はまさに大地震勃発時で、大学は全学、靖国神社に退避中であって、増田総長と研究所所長安孫子とが、その靖国神社境内で、激しい余震に揺られながら、クリディアティ学長をお迎えした。異常事態の中での会談は、短時間のものではあったが、ワガドゥグ大学からは、近々に外国語教育

の一環で、日本語教育を開始する予定であること、ついでには、法政大学、とくに国際日本学研究所からの協力を得たいという要請が行われ、それに対して、増田総長からは、可能な協力は惜しまないとの返答がなされた。歴史的な震災のただ中で、有意義な、そしてまさに「忘れられない会見」（クリディアティ学長）が行われたわけである。

【記事執筆：安孫子 信
（法政大学国際日本学研究所所長・教授）】

Visit to the Center by Professor Koulidiati, President of Ouagadougou University, Burkina Faso

Date: Friday, 11 March 2011, 15:00-
Venue: Hosei University Research Center for
International Japanese Studies (HIJAS)

President Jean Koulidiati of Ouagadougou University in the Republic Burkina Faso, West Africa was in Japan on appointment as Opinion Leader by the Ministry of Foreign Affairs, and visited Hosei University as well as the Research Center for International Japanese Studies on 11 March, the day of the massive earthquake. The time of his visit coincided with the earthquake occurring, and the whole university had taken refuge in

Yasukuni Shrine. President Masuda and Center Director Abiko met with President Koulidiati inside Yasukuni Shrine while the severe aftershocks continued. In such extreme circumstances, conversation was kept short, but we heard from President Koulidiati of plans to begin Japanese teaching as part of a recent foreign language education initiative. He requested the cooperation of Hosei University and particular the Research Center for International Japanese Studies, to which President Masuda agreed to offer all possible cooperation. Amidst the historic earthquake, then, a significant and “unforgettable meeting” (the words of President Koulidiati) was held.

Report by: ABIKO Shin (Director, Hosei University
Research Center for International Japanese Studies;
Professor, Faculty of Letters)

布基纳法索国立瓦加杜古大学校长 Koulidiati 访问本研究所

時 間：2011年3月11日（星期五）15:00 -
会 場：法政大学国際日本学研究所（HIJAS）

应日本外务省“文化领军人物招聘计划”之邀请访问日本的西非布基纳法索共和国国立瓦加杜古大学校长Koulidiati先生，3月11日大地震当天访问了法政大学及国际日本学研究所。访问的时间正值地震发生，由于法政

大学内全体师生暂时退避至靖国神社内，増田校长和安孙子研究所在剧烈晃动的靖国神社内迎接了Koulidiati先生。由于余震不断，这次会见只进行了很短的时间。瓦加杜古大学计划于近期作为外语教学的一环开设日语学科，因此希望得到法政大学、尤其是国际日本研究所的支持。而对此増田校长表示将不遗余力地提供帮助。在史无前例的大震災中，这次独具意义、且“令人难忘”的会见得以实现。

【执笔者：安孙子 信（法政大学国際日本学研究所所長・教授）】



左より 安孫子信所長（教授）、増田壽男総長、ジャン・クリディアティ学長、林公美本部長

부르키나파소 공화국 와가두구대학 크리디아티 학장의 연구소 방문

일 시: 2011년3월11일(금) 15:00 ~

장 소: 호세이대학 국제일본학연구소 (HIJAS)

일본 외무성의 오피니언 리더 초빙으로 일본을 방문 중이었던 서아프리카 부르키나파소 공화국 와가두구국립대학 크리디아티 학장이 동일본 대지진이 발생했던 3월 11일, 호세이대학 및 국제일본학연구소를 방문하셨다. 방문 예정시간은 일본 대지진이 발생한 시간으로 대학 전체가 야스쿠니(靖国)신사로 피난 중이었고, 마스다(増田) 총장과 아비코(安孫子) 연구소장은 야스쿠니

신사 경내가 여진으로 심하게 흔들리는 와중에 크리디아티 학장을 맞이했다. 긴급비상사태임에도 불구하고 회담은 진행됐다. 와가두구대학은 앞으로 외국어 교육의 일환으로 일본어 교육을 시행할 예정으로 호세이대학 국제일본학연구소에 협조요청을 했고, 이에 대해 마스다 총장은 가능한 한 협조를 아끼지 않겠다고 답변했다. 사상 유례없는 지진재해의 한복판에서 의미 있는, 그리고 “잊을 수 없는 회견(크리디아티 학장)” 이었던 것이다.

【기사집필 : 아비코 신

(安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장·교수)】

小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明

ヨーゼフ・クライナー (編)

目次

第1部 小シーボルトの生涯と業績

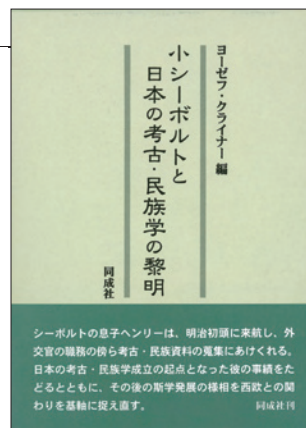
- ・もう1人のシーボルト.....ヨーゼフ・クライナー
- ・小シーボルト資料集成.....ヨーゼフ・クライナー
- ・ブランデンシュタイン家資料に見られる小シーボルトの日本での活動.....宮坂 正英
- ・小シーボルトと日本考古学の黎明期.....小倉 淳一

第2部 日本の民族学的研究

- ・自然人類学が解明する日本人の起源.....篠田 謙一
- ・小シーボルト以後の日本民族学・文化人類学の展開.....ヨーゼフ・クライナー
- ・ヴィーンにおける日本の民族学的研究.....住谷 一彦
- ・文化人類学者による日本考察.....ハンス・ディター・オイルシュレーガー
- ・アンドレ・ルロワ＝ゲーランと日本.....ジョゼフ・キブルツ
- ・ヴィーン大学の事例にみる日本学の「ヴィジュアル・ターン」.....セップ・リンハルト

第3部 日本研究と日本コレクション

- ・あるコレクションの一生.....ヨハネス・ヴィーニンガー
- ・ピーボディー・エセックス博物館の日本コレクション形成.....小林 淳一
- ・ヨーロッパにおけるアイヌ民族コレクション.....ハンス・ディター・オイルシュレーガー
- ・江戸期の日本におけるものの収集について.....ヴォルフガング・ミヒェル
- ・在欧州能楽面の研究.....西野 春雄
- ・子爵澁澤敬三のアチック・ミュージアム.....近藤 雅樹



ニュースレター NO.15 翻訳者紹介

(英語翻訳)

バーバラ・クロス (ロンドン大学 SOAS)

鈴村 裕輔 (法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)

(中国語翻訳)

李 潤沢 (法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)

楊 偉 (法政大学国際日本学研究所外国人客員研究員・
四川外国語学院日本学研究所所長)

(韓国語翻訳)

金 英美 (法政大学国際日本学研究所学術研究員)



法政大学国際日本学研究所
国際日本学研究所

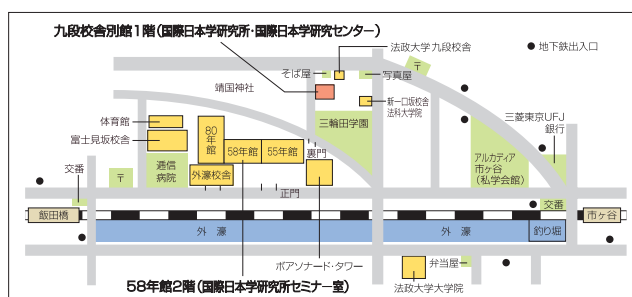
〒102-0073

東京都千代田区九段北 3-2-3 九段校舎別館 1 階

TEL : 03-3264-9682 FAX : 03-3264-9884

E-mail: nihon@hosei.ac.jp

URL: <http://aterui.i.hosei.ac.jp>



この冊子は再生紙を使用しています。